

これから、都市をつくる仕事

～蓑原敬の構想力と思想を次世代に継承する～



目 次

■講演概要／主催者代表挨拶	山下裕子	-----	01
■若手との対話の前に	養原敬	-----	02
■ディスカッション	養原敬と若手5名	-----	05
■会場との対話	「6次化による地域活性化」「選ばれる都市の教育」	-----	21
■最後に		-----	23
■対話を終えて	武田重昭／尾辻信宣	-----	24

これから、都市をつくる仕事 ～蓑原敬の構想力と思想を次世代に継承する～

蓑原敬と若手の対話・議論により、「これから、都市をつくる仕事」の本質を探求しようと福岡に集いました。

- 日時 2017年2月27日（月）19:00～21:15
- 会場 アクロス福岡 円形ホール 福岡市中央区天神 1-1-1
- メイン・スピーカー 蓑原 敬 蓑原計画事務所代表
- メンバー
 - 武田 重昭 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科助教
 - 石橋 知也 福岡大学工学部社会デザイン工学科助教
 - 黒瀬 武史 九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門准教授
 - 水谷 元 atelier HUGE/ヒュージ空間設計室主宰
 - 榎本 拓真 Local Knowledge Platform 合同会社
 - 山下 裕子 ひと・ネットワーククリエイター
 - 尾辻 信宣 合同会社G計画デザイン研究所代表社員/JUDI九州
 - 福田 忠昭 LOCAL&DESIGN株式会社代表取締役/JUDI九州幹事
 - 西海 哲哉 株式会社日建設計九州オフィス
 - 片田江由佳 アイランドシティ・アーバンデザインセンター/JUDI九州



■主催者「蓑原敬先生の話をも福岡でトコトン聴く会」代表挨拶 山下裕子

都市計画家である蓑原先生は3年前に『これからの日本に都市計画は必要ですか（学芸出版社）』という本を出版されました。その記念シンポジウムを拝聴した際に、共著の30歳台の方々と先生がステージでディスカッションされていたのを拝見し、その議論がとても面白かったことが強く印象に残っています。蓑原先生のビビットなお言葉を糧に、全国の都市づくりを担う若手の方々とも語り合う機会をつくれませんか。それが今回の企画の発端でした。

今日は、福岡出身で福岡についてひとかたならぬ思いを寄せている蓑原先生と福岡のこれからの都市づくりを大きく担っていかれるであろう30代40代の方々との、福岡のこれからのことについて、日本の都市計画、それに先生の構想力・思想について、大いに語っていただければと思っています。

今日の会が長くても短いひとときとなり、これからの力強くつながれば幸いです。



■若手との対話の前に



荻原 敬 みのらは けい
荻原計画事務所代表

1933年東京都生まれ。疎開で、代々の故郷である福岡に移住し、当仁小、附中卒、修猷館に2年まで在学、28年卒扱い。東京大学教養学部アメリカ科で地域研究を専攻、卒業後、日本大学で建築を学ぶ。ペンシルベニア大学大学院に留学、アメリカの都市計画に触れる。建設省、茨城県で都市計画と住宅行政の政策立案と実施の現場を経験。1989年(株)荻原計画事務所を設立。主な著書に「成熟のための都市再生」、「地域主権で始まる本当の都市計画・まちづくり」、「日本に都市計画は必要ですか」(共著)「まちづくりの哲学」(共著)など多数。

荻原 荻原です。今日は、本当に沢山の方にこうやって来ていただいて、非常にうれしいんですよ。ただ、大勢の方の前で、今日この会場で5人の若手と対話するのは、僕のここに来た意図、思惑と少し食い違うところがあるので、そこから、まずお話しします。

何で、こういう羽目になったかっていう、きっかけなんです。富山で日本の都市計画について、根底から議論をしました。

最初に JUDI の公募型プロジェクトっていうのがあって、会員の井口勝文さんが『歩行者空間による中心市街地の構成』という研究をされていました。その一環で昨年、富山で議論する機会を設けてもらいました。井口さんは、九州大学の建築の出身で、竹中工務店に長いこと勤められて、日本のまちづくりをずっとやってこられたんだけど、イタリアで都市デザインの教育を受けてこられて、僕も一度、一緒に仕事をしたことあるんですが。そんな彼が疑問にあげたのが「日本とイタリアの都市の在り方」。それから、「人が都市をどういうふうに、都市の中に住むかっていうことを比較して、つらつらと考えると、非常に日本は都市をつくってないんじゃないか。おかしいんじゃないか。」ということを痛切に感じられたらしい。その井口さんが、長いこと日本の中で、そういう都市づくりに関わってこられた専門家、その中でも一番中心的な人物にヒアリングして自分の疑問をぶつけるという会をやったんです。

例えば、関西の大阪大学名誉教授の鳴海邦碩さん。鳴海さんは、上田篤さんという人と一緒になって1972年に旭川の買物公

園を手がけられました。日本で初めて、既存の道路を公園のような歩行者空間にして、人が優先の公共的な空間として使うというようなことを始めたわけです。そういう先駆けをやった人とか。その他に横浜の馬車道とか、多くの都市空間を手がけられた高橋志保彦さんなど、いろんな人にインタビューをして、かつて1970年代から一生懸命やってきた人たちが、何で日本の都市形成に影響力を必ずしも与えてないんだろうか。おかしいんじゃないかと。井口さん自身は、イタリアに半分住んでるんだから、「やっぱり日本のまちな在り方っていうのは違うんじゃないか」ということを、ずっとそういう関係の人達と対話を重ねてこられました。その最後の締めくくり私に指名されて、その彼と一緒に議論をするという羽目になったわけです。

その井口さんの『歩行者空間による中心市街地の構成』のレポートが都市環境デザイン会議 (JUDI) の公式ホームページ (<http://www.judi.gr.jp/>) に上がっているの、是非とも会場の皆さんは見てください。



「荻原 敬」インタビュー in 富山会場風景
JUDI 公募型プロジェクト「日本の中心市街地と歩行者空間」
<http://www.judi.gr.jp/> にレポートを掲載

その富山で私がインタビューを受けたのがこの写真です。大勢いますが、右下の写真の真ん中が、京田さんという富山市で都市計画をずっとやってきた中心人物で、その横で、頭を手でかいているのが山下裕子さんですね。それから、いろんな人が一緒になって議論をして、本当に日本のまちな在り方っていうのは、どういうふうなことなんだろう。それに対して井口さんは、「今の日本のまちなづくり方っていうのはおかしいんじゃないか。蒸留水みたいになって、人間的な空間ではないし、人間の活動がキチッと自由に、楽しくやれるような場になってない。それは非常に絶望的だ」とおっしゃる。最後に彼は、「だけど、ある意味、日本はロボット化された社会が出来ていて、そういう非常に抽象的なロボットの空間をつくっちゃってしまった。そういう点では、世界ブランドじゃないか。」みたいなこ

とを話したもんですから、私は、「それはちょっと違うんじゃないか」と申し上げたんです。もうちょっと、人間とまちとの関わり方っていうのは違う分け方があるんじゃないか。そういうことを、ずっと私は考えてきたし、先ほど紹介があった2014年に刊行した本（『白熱講義 これからの日本に都市計画は必要ですか』学芸出版社）では、日本に都市計画は必要かっていうのは、当時一緒に執筆した人達もほとんどが30代で、これから日本を背負って立つ人と一緒になってやった。そういう議論を根底から富山でやり直しました。

都市計画をめぐる基本の軸が変わりつつある。地球環境、人口爆発、等々にどう対応していくか？

結果として、根底から議論しようと考えたら、**我々が考えてきた都市計画をめぐる基本的な考え方の軸が大きく変わりつつある**と感じました。一番大きく変っているのは、**地球環境の問題**です。今、我々はこのままの形で工業化が進み、これから増えてく人口に向かって、同じような生活を確保しようとする、明らかに地球環境は破壊の方向に向かっていくことが、はっきりしてきている。一番典型的な言説は『アントロポセン』という、今まで、我々は、地質学的に言う『完新世』という所に住んでるわけですが、そういうのは1800年代の終わりに工業化の時代から終わって『人新世』というアントロポセンという概念で考えなきゃならないぐらい、人が地層に対して、あるいは大気に対して、あるいは大気を越えた成層圏のオゾンに対して影響力を与えちゃって、地球は、生き物、人間の住処として不適切な環境になりつつある。それを指摘したのがクルツェンという地層学者（クルツェンはノーベル賞をもらっている）。そういうようなことが、非常に現実的な問題として、我々は意識しなきゃならない。にもかかわらず、本当に我々のまちづくりとか、我々の地域開発とかいう概念の中で、そういうことがキチッとリフレインされてるだろうかと、はっきり言って、リフレインされてないんですよ。

それから、もう一つ、もっと決定的なのは、私が生まれた1933年、その時代は、せいぜい地球上の人口が十数億の時代でした。それが今75億人で、かつ、このまま行くと**近い将来、世界は人口100億人の時代になる**ということ。そういう人間社会に対して、今のような近代社会が、近代的な生活をみんな確保しようとする、どういうふうになるんだろうか。今までの住み方とは全く違うんじゃないか。その時に、今まで我々が住んできたようなまちとか住まいとかというものの在り方が、今のままの形で進むんだろうかっていうことを根本的に考えなきゃいけない。私は、もう間もなく、この世を去りますけども、そういうことを今の30代、40代の人々が真剣になって考えない限り、本当

に日本の環境は良くなるんじゃないか。そういう思いを踏まえて、先ほどのような「都市計画は、日本としては必要だ。」みたいな話をしてるし、できるだけ、そういう形の話をもっとできればと思っています。

たまたま、今日、この会場に来ていただいていますけれど、福岡出身の野口浩平さんという人がいて、彼は、代官山の『代スキ会』の事務局をやられていて、代官山を動かして、とんでもないシンポジウムを開催した上に、その記録として、私と宮台真司という社会学者との2人の対談ショーをやって、本を出したんです。これはお勧めするのは非常に難しいというか、宮台真司さんが何しろ力を入れて書いちゃったもんだから、非常に分かりにくいところがあって、なかなか読みにくいことは確かなんです。その本の中で、私と宮台さんが語っていることは同じようなことでした。基本的に、今まで我々が、ある種安定した地球環境の中で、ある種安定したライフスタイルというものを見据えて計画をし、造っていけば、世の中がうまく治まると思ってやってきた。しかしながら、そういう構造の中には、もう無いということを前提で物事考えなきゃいけないという時代に我々が入ってきています。どういうことかという、一つは**今のよう人口の問題とか、環境の問題を含め、我々が考えなきゃならないのが、価値の軸が動いている**ということ。

それから、逆に、そういうことを考える以前は、近代的な思想の中で我々が考えてきたベースは、ニュートンとかデカルトが考えていたように、空間を絶対空間と、時間は絶対的な時間が流れていて、そういうものの中で、いわば、神の申し子としての人間が、賢く立ち回れば世の中うまくいくといったような近代初期の考え方に従って、我々は計画理論みたいなものを組み立てて来たし、それに従った計画技術というものやってきた。けれども、そういう構造の中で今はもう動いてない。はっきり言って、例えば、世の中の認識、宇宙の認識として、絶対時間とか絶対空間なんてことは、もうなくて、我々は、そういう意味では、非常に相対的なものでしか、時間も考えられないし、空間も考えられなくなってる。さらに、物自体が本当に存在するのかどうかというのも疑わしいようなことが量子力学の結果から出てきている。我々が本当にそういう物理的な空間の認識、時間の認識すら、基本的に考え直さなきゃいけないし、我々は、そういうことも認識の上で、人間関係、生物の進化というものがあるかどうかにあるかと考え直さなきゃいけない。そうすると、進化論の中でも例えば、進化の結果として、自然淘汰でうまくいくと、神の導き手があるかのような進化論ってのが、もはや存在していない。進化論も確率的なものの結果でしかあり得ないから、将来我々がどういふふうに向かうなんていうのは、結果として安堵されてるわけではなくて、我々自身が、実際にどういふふうで、我々の運命を決めるかということ

に向かっていかない限りは、うまくいかないんだっていうことが、進化論として出てきている。もはや、物理学とか生物学とか、そういうものの究極形の中ですら、我々は未来像というものを固定して、それに向かって粛々としてやっていけばいいみたいな、安易な考え方は取れなくなっているという実態があるのです。そういう中で、我々は、しかし、生きていて、しかも、この地球環境をこれだけ汚染しながら、どうやって生き続けなきゃいけないか。しかも 100 億の人間をそこで、生き続けさせるようなシナリオを考えなきゃいけないという時に、どう考えたらいいんだろうっていうと、実は我々の中に、はっきりした展望は持ち得ていないわけです。まして、我々の都市がどうあるべきかとか、我々のまちがどうあるべきかというようなことについて、近代の初期、パリみたいなことになればいいとか、ロンドンみたいなことになればいいっていうのは、実は幻想だったってことも分かってきた。じゃ、そういうことにならないように都市計画法で線引きして、市街化区域をつくって、その中を粛々とやればいいのかというようなことをやろうとしたけども、見事に破綻してうまくいかない。一方で、都市計画でそういうことを議論しながら、立地適正化法なんて不思議な法律をつくって、どういうふうにしたらいいかってことについての手探りをやってるっていうような状況です。

そういう意味で言うと、今までのように全体の中で、将来のことをキチッと考えられないとすると、基本的に、我々の価値全体の体系が動いていくという座標軸の中において、なおかつ、その中で我々が何らかの企てをして、何らかの加工をこの地球の上に加えない限りは、生き続けていけないということも、はっきりしてきて。その中で、一体我々は、どうしたらいいんだっていうことを議論すると、**どうしたらいいか。実は分からないわけです。**

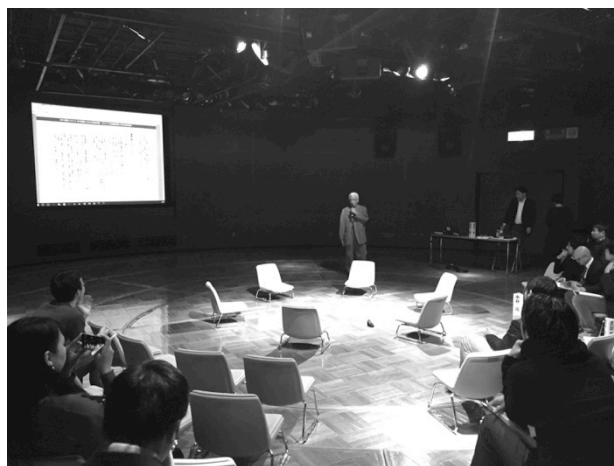
もっと若い人にメッセージせよと山下さんに担がれちゃった。

私は 50 年、もう半世紀にわたって、こういうことを一生懸命考えたり、仕事したりしてきましたけども。今が一番、そういう意味では、分かりにくい時期になってる。でも、私が分かりにくくて悩んでたって、私は間もなく死んじゃいますから、どうでもいいんですが。30 代、40 代の方は、これから何十年も生きなきゃいけない。地球に住む大半の人口の平均寿命が 80 歳とか 100 歳とかに、すぐなっちゃうという中で生き続けるとすれば、そういった問題について根底から考え直さなきゃいけないんじゃないか、というような類いの話を富山のインタビューというか、対話集会の時にやったわけです。そしたら、そこに山下さんという人がいまして、「そういう話は、他でもやった方がいい。若い人をつかまえて、若い人と一緒になって、そういう

議論をしてください。」っていう話になって。それが今日、第 1 回ということで、まず福岡で始まるということです。明日、明後日は、熊本に行って話をしているかもしれないし、これから後、どういう形でどうなるか。山下さんっていう、とんでもない、いろんなことを創り出す人がいますから。私はこの後のことは分かりません。

ともかく、そういう意味で、今日、私がこれからお願いしたいと思っているのは、**福岡や関西で今、頑張っている 5 人の若い人達に、「あなたは一体何を考えてるんですか?」、「どういことをやろうとしてるんですか?」**ということを伺った上で、**私が今のような疑問を発して、それで議論をする。そういう議論の展開とか、終末については、何らのシナリオもありません。出会いの場ですから、どうなるか分かりませんが、これから、そういう議論を始めたい**と思っております。

ということで、5 人の若い人達にお座りいただいて。ここにお座りいただく 5 人の若い方達と一緒に、これから始めたいと思います。



■ディスカッション

蓑原敬と5名の若手 一武田、石橋、黒瀬、水谷、榎本ー がホール中央で車座になり対話をはじめます。



武田 先生との対話の前にちょっとだけ、解説をさせていただきたいと思います。我々は、このメンバーで5時に集まって控室で2時間ほど、ウォーミングアップと言いますか、どっぷり蓑原先生と既にお話をさせていただいておりますので、いまの蓑原先生のお話も何となく、そういうことだったのかとうなずける内容だったわけですが、会場の皆さんが何の予習もなく、いきなり今の蓑原先生の最初のお話を聴かれて、さて若手でいったい何の対話するんだろうっていうお感じなのかもしれませんので、少しだけ、私からお話をさせていただきます。



武田重昭 たけだ しげあき
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科助教
1975年神戸市生まれ。専門は緑地計画学。UR都市機構にて屋外空間の計画・設計や都市再生における景観・環境施策のプロデュースに携わった後、兵庫県立人と自然の博物館にて生涯学習プログラムの企画運営を実践。著書に「パブリックライフ学入門」（共訳・鹿島出版会2016）、「都市を変える水辺アクション」（共著・学芸出版社2015）など。

最初に山下さんからもお話がありました、この『白熱講義 これからの日本に都市計画は必要ですか（学芸出版社）』という本があります。これは、1970年代生まれの若手を集めて東京で議論をされた内容をまとめた本です。それに対して今日は、

1980年代生まれの若手に集まっていただいて福岡でやるということで、年代の違いが10年あるってということと、東京と福岡という日本の首都と地方都市というような対比があるというのが、今日の一つの特徴かなと思っています。僕は1975年生まれの大阪在住なので、ちょうど間を取って呼んでいただいたかなと思っていて、今日はモデレーター（進行役）を仰せつかっています。基本的には、蓑原先生と若手の対話の場なので、僕が登場しない方がいい進行になるかなと思っているので、皆さんよろしくお祈りします。

それからもう一つ。これも蓑原先生からご紹介がありました、『まちづくりの哲学（ミネルヴァ書房）』という本ですね、『代スキ会』事務局の野口さんも会場に来られているので、後ほどコメントもいただければと思います。この本の議論もなかなか奥深いものでして、例えば「第1章 まちづくりとは何か」、「第2章 よいまちとは何か」、「第3章 よいまちは実現するか」、「第4章 まちづくりは幸福を実現するか」というような構成になっています。今日は、そういった辺りも含めて、対話の中で若手が考えていることと、蓑原先生が今までご経験されてきたことを合わせて、何か新しい発見があるとか、この場で、新しい気付きがあるような、そういった場になればいいなと思っています。

今日のこの会場のレイアウトは基本的には山下さんがアレンジされたものです。この輪の中で登壇者が対話をしているのを、みんなが見るということになっています。あんまり後ろ（客席）を意識するなということですので、基本的には、ここでしゃべっていることを皆さんに聴いていただくというようなスタンスで、進められればと思っています。最後に少しフロアからの質問の時間なども取れればと思っていますので、是非とも会場の皆さんにも参加をよろしくお願いします。以上が最初の解説です。それでは、早速対話を始めたいと思います。

先ほど、楽屋で先生を囲んで長い間、いろんな話をしていましたが、いまの蓑原先生のお話にもあったとおり、特に世界の人口ですとか、結果としてしか今がないとか。蓑原先生自身も特に何かどうすればいいという正しい答えがあるわけでもないとおっしゃっている中で、普段こういうことに取り組んでいるとか、先ほどの楽屋の話の中で、こんなことが気になったとか。自己紹介も兼ねて、少し最初に若手の皆さんからお話いただくのがいいかなと思っております。どなたから、いきましょ。榎本さんからいきますか。

それぞれの“都市”にかかわる仕事、経歴、問題意識



榎本拓真 えのもと たくま
Local Knowledge Platform 合同会社
1982年新潟県魚沼生まれ。博士（工学）、横浜国立大学大学院修了後、九州大学大学院学術研究員等を経て、2016年4月より現職。これまで、大手私鉄事業者による交通戦略策定のコンサルティングやエリアマネジメント組織の運営、各種プロジェクト評価等に従事。その他、国連ハビタット（国際連合人間居住計画）コンサルタント等。専門は都市交通計画、都市・地域計画、都市政策、交通政策。

榎本 はい。榎本と申します。私は新潟県の魚沼市の出身で、大学時代は横浜で過ごしました。当時、ITバブルがはじけて、就職がすごい氷河期で。東京にいるイメージがつかなかったので、何となく元気な街に行こうと思って福岡に流れ着きました。僕の専門は交通なんですけど、もともと交通なんて全然やりたくなくて、都市デザインとかやりたかったんです。でも、当時まだウェブがないので、河合塾の大きな冊子を持って来て、ペラペラめくっていると、建築の所には「地区計画」と書いてあって、土木の所には「国土計画」と書いてある。当時は、スケールの大きいことがやりたいと思って、土木を選びました。でも、実はその時、『全総』なんて全て終わっているし、国土計画なんて過去の遺産だったわけですけど。それに憧れを持って、入学をしました。

ただ、大学に入ると、ドンドン「交通」っていうのが非常に面白くなってきました。何でかというと、交通がないと人の生活が維持できないわけですね。土地利用を描いても、やっぱり交通が物も人も運ぶことを考えている分野なわけなので。そういう意味で、ドンドン面白くなって、博士まで取りました。ただ、博士を取ったタイミングで、都市計画を僕はまだやったことがないから、学生に何を教えたらいいいのかということに悩み始めました。教科書は読んだら分かるだろうと考え、実務としての都市計画の経験を積むために、一旦、現場に出てみようと思ひ、今、福岡でコンサルをしています。具体的には、いくつかの『エリアマネジメント』のお仕事を手伝ったりだとか、バス事業者さんのお手伝いをしたりだとか、交通をメインに、都市政策、経済政策含めて、いろんな政策を作るところのお手伝いをしています。取りあえず私の自己紹介は以上です。

蓑原 非常に面白いっていうか。僕の経験で言うと、土木系の教育を受けた人っていうのは、申し訳ないけれども、都市計画とかまちとか、生活とかいうことについて関心が薄い人が多いもんだから、日本のまちはあんまり良くならないところがあるんだけど。今の榎本さんの教育のバックグラウンドと、今、榎本さんがやっていることの間には、随分ズレがあるなっていうようなことをちょっと感じました。そこが面白いっていうことの一つなんですけど。でも彼が中村文彦さんの弟子だということを知って納得しました。彼の師の中村先生は土木というような垣根を超えている数少ない先生です。

もう一つは、国土計画っていうのは、本当に劣化しちゃって必要ないみたいな話があったんで、ちょっと私は異議を申し立てたいんです。

まず、第1の問題は、3.11が起こった時に、私は最初に4月の段階で、既にそういうことを発言したんだけど。今こそもう一度、死にかけてる国土計画を復帰させるべきだと。何かかという、3.11で明らかになったのは日清戦争とか、いろんなことをやった結果、日本列島を一つのシステムにしちゃった。その結果、どっか一つが崩れると全体がおかしくなっちゃうって構造のはっきり見えてきたこと。例えば、はっきりしてるのは、牛乳のパックを作る工場が東北にあったために、しばらくの間、牛乳の流通が止まったんですよ。そういうのは、どういうことかっていうと、日本の国土全体がワンシステムで、東京中心でやってるっていうことに本質的な問題があって、むしろ、**国土計画として、もう一度日本を幾つかの分極点に分けていくようなことを、真剣にやらなきゃいけないんじゃないか**ということが第1点。

それから第2点は、復興の問題。震災復興の問題って、被災地の人をどういうふうにキチッと復旧、復興に向けて落ち着かせるかっていうことが、最大の問題だけでも。それはローカルな形で、一生懸命努力していけばいいんですが、そういう復旧、復興の形の中で大きな問題は、高齢化社会の中で自ら自立的に地域の中で復興する、あるいは、産業を興すっていうことが非常に難しい構造の中で、もう一度国土とか、あるいは、県とかという立場で、広域的に、むしろ国際的な観点から、キチッと産業の振興とか人の養成とか、そういうことをやらないとまずいんじゃないかということを書いて。私は今、そういう時期に、やっぱりあると思っていますし、恐らく、3.11の震災っていうのは、平安時代前期に起きた貞観地震（西暦869年（貞観11年））と非常に近い構造を示していますので、まず、その例に倣うと、この10年か、20年ぐらいの間に、連続的に東海地震と南海地震が起こってくるということを予想せざるを得ない。その貞観地震の時に、何が起こったかという、富士山が噴火しただけではなくて、鳥海山が噴火して、しばらく遅れて、阿蘇山がおかしくなった。いろんな形で、**日本列島の地質構造**

が大きく動くということが予想されるので、そういうことを考えると、ますます、国家的な観点の意識を抜きにして議論できない。私はこの3.11を経験してあぶり出された日本の国土・国家的な問題だと思ってるんです。ちょっと今の榎本さんの発言に対してコメントさせていただきました。

榎本 すみません。僕、国土計画は大事だと思ってるんです。無くしたことが愚策だと思っています。というのは、地域振興みたいな話というのは産業とセットで、それは多分、都市単位とか自治体単位じゃまず描けない話だと思います。なので、少なくともブロック単位、できれば国単位で、いろいろとやっていかなきゃいけない。むしろ、太平洋ベルトが遮断された時に、我々は産業をどこで補うんですかというような話は、国土計画レベルでしか担保できないので、本当にそういう話をやっていかなきゃいけないだろうなというのを、つくづく思っています。



黒瀬武史 くらせ たけふみ
九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門准教授
1981年福岡市生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業、同修士課程修了。日建設計都市デザイン室にて中東・ロシアの都市開発を担当。2010年から東京大学都市工学科助教、清水港日の出埠頭の再生や岩手県大槌町の震災復興に携わる。2016年から九州大学大学院准教授。専門はブラウンフィールドの再生、人口減少都市の都市計画。共著に『都市経営時代のアーバンデザイン』（学芸出版）など。

黒瀬 黒瀬です。よろしくお願ひします。私は昨年3月まで東京にいて岩手県の大槌町で、震災のあとの復興のお手伝いしていたのですが、やはり今、藪原先生がおっしゃったように、被災地には仕事がない。仕事がないから住み続けたくても住み続けられないということに、6年たって収斂されてきた気がします。残念ながら、デザインの質がいいとか悪いとか、そういうところよりも、仕事があるかどうかという点を現実には突き付けられてる。その面で、東日本大震災で役に立っていたのは、産業施設の復興を対象にした中小企業庁のグループ補助金でした。民間事業者がグループを作り、そのグループの産業施設の復旧に対して国が資金的な支援をする制度です。今まではずっと安全が大切だ、住宅が最優先だということで進んできたが、実は、仕事がなくなったら、その地域の将来が見えない。多分、そこが実際の復興に効いてるのではないかと僕は思っています。

「防潮堤を造る、造らない」という議論や「どこの風景を大切にしたい」という話を、一生懸命、地域の方々とやってきました。でも、6年経って思うのは、結局は、地域の産業をどう描くかが重要だと感じます。しかも、震災前の地域で力のあったプレイヤーは、現位置復旧ではなく、別のところに移転した方が早いので、被災地の外に移転してしまう。復興事業が終わった頃には、力のある産業が外に出てしまい、土地だけが残る。被災地だけではなくて、人口が減っていく多くのニュータウンも同じなのかもしれませんが、そういう何も無いところからでも新しい何かを生み出す、ある種の余地みたいなものをつくり出していけるかっていうのが、これからの都市計画・都市デザインの大きなテーマになると思っています。それが単なる空き地なのか、何かを生み出すかもしれない（人のつながりも含めた）豊かな土壌のようなものなのかと。そういうところが、今自分が興味を持ってるところです。

武田 そしたら、先ほど「土木がダメにしているんじゃないか。」との指摘があったので、石橋さんをお願いします。



石橋知也 いしはし ともや
福岡大学工学部社会デザイン工学科助教
1980年福岡市生まれ。博士（工学）（「戦後期の福岡市政における臨海部開発の計画経緯と影響に関する研究」九州大学2014年）。2005年九州大学大学院工学部都市環境システム工学専攻修了、2006年同助手、2008年より現職。専門は都市形成史、景観論。『風景のとらえ方・つくり方—九州実践編』（共立出版、共著）など。

石橋 こんにちは。福岡大学工学部社会デザイン工学科で助教をしております石橋です。私は、藪原先生の高校の後輩でもあって、藪原先生のプロフィールにも書かれていますので、それで、すごく先生には縁を感じています。

私の自己紹介を少ししますと、私も榎本さんと同じ土木の出身です。藪原先生もよくご存じの九州大学の樋口明彦先生の研究室を出ています。樋口先生は、アメリカでアーバンデザインとか港のデザイン等をされた方で、土木の先生の中では、随分雰囲気の違い先生なんです。研究室は、アトリエみたいなどころでした。そこでは、私は、ある都市の街路の研究を行っていて、その都市の模型を作って、その模型を囲んで関係者で協議をしながらデザインを進めていくみたいな、大学でありながら

実践的な研究室でした。当時、僕は自分自身の修行だと思っていて、研究室に学部生の4年からトータル4年間在籍して、その後、福岡大学の方に助手として入りました。その福岡大学の研究室は、今で言うコミュニティデザイン、参加型のまちづくりを実践的にやられている柴田久先生の研究室です。そちらで今度は、実際にワークショップで、まちに入って、計画作りとか、デザインをやっています。僕の中では、研究室は変わったんですけど、割とずっとリニアに、土木でありながら、参加型のまちづくりの中で都市空間を対象に実践的なデザインや研究に関わってきています。

蓑原先生と今回こうやって一緒に対話する機会を得られたのは、どこに遡るかという、私が2014年に博士論文をとりまとめたんですけど、それまでに私は9年間ぐらいドクター生をしていてすごく時間がかかったんです。その博士論文のまとめの中で、間接的にですが、一つの光明が見えたきっかけを与えてくださったのが、蓑原先生が執筆されたコラムでした。そこには「これから50年先のことをいろいろ議論したい、考えたいのであれば、まず50年前に1度立ち返って、その時のことから、学ぶことが多いであろう」というようなことを示唆されていました。そのコラムに触れたのが2010年ぐらいでしたので、そこからの50年前、つまり1960年ですね。1960年の頃について、しっかり見なきゃいけないんじゃないかということ、自分で気付くことができました。

福岡の1960年頃は、ある種の都市づくりの戦略とか、都市が目指そうとした方向性・将来ビジョンというものがどういったものだったのかということ、ひも解くことに価値があるんじゃないかという仮説のもとで論文を取りまとめました。実は、その1960年代に福岡は、**ダイナミックに都市のベクトルを変えていた**ということに、**図らずも気付くことができたわけ**です。そういった話を、実は今まで蓑原先生と数回お会いする中で先生にぶつけてきていて、今日、また、どんな議論ができるか、非常に緊張しているのですが、議論を楽しめたらいいなと思っています。

蓑原 彼の恩師である樋口明彦さんのことについて、ちょっと言及しますと。彼は確か、マリコンですよね。五洋建設にいたんですけども、嫌になっちゃって。それでアメリカへドクターを取りに勉強しに行ったんですよね。だから、土木の人も、アメリカに行って勉強すると途端に変わっちゃう。何故かっていうと、先進諸国の中で都市計画とか、地域計画とか、そういうことを考える人間が、土木とか建築とか造園とかセクトの中で、セクトの利害に従って考えるなんていうことはしない世界なんです。日本だけが、非常に後進的に、そういうことに縛られてるわけで。だから、残念ながら、ろくなまちはできないし。本当にいいモデル的な場所ってのは、できない。だけど、樋口

さんは、そういうことを超えてアメリカへ行って、そのアメリカの中で勉強してきた。彼は、ニューヨークのいろいろな土地利用転換とか新しいハイテク産業の動勢とかをずっとやってきていて、その後も私はずっとお付き合いをさせていただき、いろいろな議論をしてきていましたのでよく存じ上げています。しかも、面白いのは、九大に公募で応募したんですよね、彼は応募した挙げ句、やってることっていうのは、コミュニティ活動とか、環境保全とか、地域社会に関わることとか、ものすごい幅広いことをやっていますよね、彼はね。僕は、本来は、我々のような商売は、そういうスタンスで、そういうふうには動かないかやいけないのに、たくさん外国で勉強してる人がいるにもかかわらず、なんで、そういうふうにならないのかなっていうのは、不思議だと思ってるんですけど。幸いにして、そういう樋口さんの勉強が、石橋さんのような方に引き継がれてるっていうのは、非常にうれしいなと思っています。

武田 土木もだいぶ座標軸が動いている。

蓑原 そうですね。本当にそうですね。

武田 はい、ありがとうございます。次は、水谷さん、お願いします。



水谷 元 みずたに はじめ
atelier HUGE/ヒュージ空間設計室主宰
1981年兵庫県神戸市生まれ、福岡県福岡市の能古島で育つ。森岡侑士に師事。都市計画・まちづくりを学ぶため、兵庫県神戸市にて都市計画事務所に勤務。福岡市内の設計事務所にて、様々な建築・インテリアの設計に携わる。2010年にatelier HUGE/ヒュージ空間設計室を設立。『現在知 vol.1 郊外 その危機と再生』(NHK出版、共著)、『地方で建築を仕事にする』(学芸出版、共著)

水谷 一番最後に回ってきて、情報が随分増えて。どのように話していいのかわからなくなっているのですけども。

僕がこういう場面によく呼ばれるのは、一応、今建築とインテリアのデザインとかやっているのですが、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、僕の父親は**水谷頼介**という**都市計画家**で、神戸でいくつかの新市街地開発の都市計画を手掛け、1970年代の後半から福岡では“シーサイドももち”を手がけました。1993年に父が他界するのですが、それまで建築家・都市計画家であった父は主に都市計画の分野で活躍していました。当時

の事務所のスタッフの方から聞いた話なのですが、父は他界する直前「本当は建築家になりたかった」との思いがあったようです。ずっとプロフィールには建築家の前に都市計画家と書かれていたのですが、最後のプロフィールには建築家を前に書いていたという話を聞きました。また父はよく「**建築の分かる都市計画家**」というふうに言われていたそうです。それで、じゃ私は、「**都市計画が分かる建築家**」になろうと決心し、父の残した蔵書や論文を読みあさったり、大学では個人的に都市計画の勉強をしたりしていました。あくまでも建築家になるという志はブレないようにしながら、1年と期限を決めて、神戸にある都市計画事務所に勤めたことがあります。そういった経緯の中で、よくこういった都市の話をするのに呼んでいただくことが非常に多いです。

私は能古島に暮らしながら、拠点として活動しているのですが、現在、能古島の住民当事者としてまちづくり協議会の副会長をやっている中で感じるがあります。おそらく後でランドスケープ・アーバンイズムという言葉が出てくると思うのですが、生活していて「なんで、土木はこんな仕事をするのか。」という場面に多々遭遇します。いわゆる景観だったり、生態系の面でも明らかに配慮されてなかったりとか。自然と人間との境界線をコントロールしている仕事かと思うのですが、実態はそうっていないというイメージがあります。それは、能古島が海に囲まれていて、山もあるという自然環境と、人の暮らす場所が近ところなので、実生活の中で感じています。そ住民当事者という立場をいいことに、市役所の方に言いたいことを言うという役割を担っています。

蓑原 僕、水谷さんとは今日初めて会ったんですが、水谷さんの親父さんの水谷頼介さんとは、ずっと昔から長い付き合いがあって。私が茨城県の住宅課長だった時に、お仕事を頼んだりしたことがあるんです。当時は、建築系の中で、地区とか都市とかということについて、はっきりとした見識を持って臨んで、そして仕事のできた数少ない人の一人だったんですね。ですから、私は特にそういう形で、水谷頼介さんにもお願いしたし、その他に藤本昌也さんとか、山下和正さんとか、そういうような人たちがその当時はいました。非常に悲しいのは、そういう形の建築系の人とか、土木系の人とか、造園系の人とかという人が、境界を越えて都市計画ということ、キチッと考えて、まちの在り方を議論したにもかかわらず、どういうわけか今、逆に、その境界・障壁がドンドン高くなっちゃって、横断できなくなっちゃった。その一つの原因は、東京大学に都市工学科というのができちゃって、都市工学というのが、都市計画の専門になっちゃって、建築系の人々が都市を議論するようなカルチャーが非常に薄れてしまった。それから、東工大が社会工学科っていうのをつくっちゃって、同じようになっている。そうし

て都市計画っていうのが非常に、本来の技術的な知識の源泉である「**建築**」であるとか、「**土木技術**」であるとか、「**造園技術**」であるとかいうことから、その根を下ろしながら、なおかつ、**都市**というものを考えるというような、**基本的なスタンスがどっかで奪われてしまった**。それを、本当に回復しなきゃいけないんだけど、それをどこで回復するかというような時代に入ってきている。まさに今の80年代はじめに生まれた皆さん方は、そういうことを自らが、これからやってくような時代になるんじゃないかと思うのです。だけど、そういう障壁があるようなんですが、**水谷さんの親父さんの世代なんかには、障壁を感じないそういう人が沢山いたんです**。建築系の人の中にもいたし、土木系の人、造園系の人もいたんだっていうことを、ちょっとコメントしておきたい。

都市計画プロパー、都市計画の根本、間戻（かんれい=間引いて戻すというやり方）の思想

黒瀬 私のことですね。「諸悪の根源」の東京大学の都市工学科出身です。

少し、生い立ちを紹介すると、私は熊本県の八代市という工場の町で生まれまして、そして大学で都市をやろうと思って都市工学科を選びました。都市というボンヤリとした言葉の後ろにある魅力にフワフワと連れて行かれた感覚がありました。そのまま大学院に進んで、都市デザイン研究室で西村幸夫先生と横浜市都市デザイン室室長だった北沢猛先生に師事しました。

就職は「最前線の一番せめぎ合っている現場が見たい」という思いがあり、日建設計で都市開発のコンサルティングの仕事に就きました。デベロッパーからフィーを頂いて、容積率を獲得するような仕事が多いのですが、私は偶然、海外の仕事を幾つかやる機会があって、初めて真っさらな土地（例えば、砂漠とか）に絵を描くという経験をしました。私が在籍した頃の都市工学科は、既に、参加のまちづくりが主流で、ゼロからまちをつくる技術は、実は教えていなかったもので、その時に初めて、日本のニュータウンがどう造られたかを本格的に勉強して、宅地の計画は画地の奥行きが大事だとか、そんなことを考えながら、やっぱり都市って面白いなということも感じた記憶があります。

その後、大学に戻った理由は、恩師の北沢先生と話した時に、今までの都市計画の技術で対応できないことを民間の会社で考える時間があるのかと問われました。「人口が減った場所、これから減る場所の都市デザインを考えなくて良いのか」と。その言葉が心に突き刺さり、それで大学に戻ることにしました。

私の専門は、工場跡地、ブラウンフィールドと呼ばれる、土壌汚染がある工場跡地の再生です。アメリカの自動車産業とか

の跡地をずっと調べていると、都市計画と環境保護をどう統合するかということに行き着く。ある工場跡地について、環境保護行政は汚染がある、都市計画行政は開発したいというせめぎ合いの中で、どうやって物事を前進させるのかということを見ると、都市計画がもともと持っていた、ある土地に対する多様な利害を調整するという機能が、実は本質にあるんだということを再認識しました。そこが大事だと思うのです。

今の都市計画が、都市計画事業とか都市計画のセクションのための都市計画になってるところがあって、これはマズイなど感じています。再び、都市計画は本当に総合的なものになり得るのかと。様々な分野を受け入れる度量の広さを持てるのかという点が一つの課題だと思っています。

もう一つは、工場跡地を見てると周りの市街地も、ドンドン人口が減っていく。企業が持つ土地所有がシンプルな大きな土地よりも、細かく割れた住宅地の画地のほうが、アメリカでは問題視されています。ミシガン州にデトロイトや、GMの本社があったフリントというまちがありますが、そういう街で人口が半分に減った時に、どうやって戸建て住宅地が再生されるか。もしくは、どうやったら次の形にまちが進化していくのかということ調べています。その中でも特に、一人当たりの維持管理する面積を増やすということに興味を持っています。空き地があれば、隣の人に管理してもらおう。あるいは隣地を買ってもらおう。例えば、10区画の街区に3世帯しか住んでない状態になっても、前向きに考えれば3倍の広さで住める。そういう新しい豊かさを享受できる可能性をどうやったら都市計画はサポートできるのかみたいなことに興味を持っています。

水谷 ちょっといいですか。

今の3倍の広さのって話すごい興味があって。後で具体的な話を伺いたいのですが。僕は能古島に住んでるので、市街地のような密集しているような所とは基本的に違って、一世帯当たりの土地の規模が大きいです。当然、高齢化も進んで、管理するのが大変っていうのが、今、問題になっています。そこをネットワーク型コミュニティって僕は呼んでいるのですが。能古島のファンを能古島の外に増やしてイベント化してしまっただけで、地元民はつまらないと思っているような雑木林や田畑などの草むしり、農作業を街中に住んでる人たちにやらしてもらおうということを考えているんです。

先ほどのお話ですが3倍になった土地を1人で管理するというのは、具体的に何か方法としてあるのですか？既にあるのであれば伺いたいのですが。

黒瀬 まず、そういう空き地の多くは、アメリカの場合、固定資産税の滞納で行政に差し押さえられています。行政は、税金が減り、空き地の維持管理費がかかってマイナスの価値の土地

をたくさん抱えてしまったということが、最初の問題でした。ですので、何とかして市民に土地を押し付けようということでも一生懸命、行政の方で考えているのが実態のようです。そこから、隣に住んでいる人であれば、隣地を1万円で買えますというプログラムが始まりました。幾らの土地でも、とにかく隣の人なら、行政が差し押さえた土地は1万円で差し上げますという、とにかく買ってこれというプログラムがある。まず買わせる戦略ですね。買ってから何をしているのかというと、今おっしゃったような、草むしり・芝刈りが一番重要な仕事ですね。モーイング（芝刈り）をどうやって住民の人にやらしてもらおうというのが出発点です。その先には、家庭菜園で野菜を作るといったのがベーシックなところ。派手な例だと、養蜂や早く育つ木を植えて林業をやりますって言って、土地を買ってしまっている人もいます。そういう住宅地でやるとバカみたいなことを始めていいよっていう状態を作っておく。アメリカは、元々用途地域が厳しいのですが、住宅以外の用途を積極的に認めるっていうふうに変えてしまう。そういう新しいものを生み出す素地をつくるようなことをやっています。どう土地を管理するってことは、用途地域とか、都市計画のいろいろなベーシックなところと、結構つながってんじゃないかなというふうに思っています。

蓑原 今、黒瀬さんが話したことの中に幾つか重要なポイントがあるんだけど。一つは、まず、都市計画ってのはどういう機能を持って、どういうふうに進んでいくということか。基本的には計画をするってのは、調整をしたり、統合的に意識して全体を引っ張っていくというような形になるんだけど。そういうことには、そういう意思決定をして、計画がうまく合理的にできたとしても、それが社会的にうまく機能するという社会システムがない限りは、絵空事でしかない。要するに、単なるマスタープランみたいなものを書いて、これでやればいいみたいな話というのは空理空論であってみたいな。実際には、どういう形でサポートするシステムがあるのか。そうすると原理的には、社会主義国とか共産主義国っていうのは一番うまくいくはずなんだけど。じゃ、近代の社会主義国政権、共産主義国政権で、我々が目指すべきモダンな、いい都市ができたかっていうと、私の知る限りでは一つもない。都市計画って、一体何だろうってことの根本が問われるわけですね。その問題が、黒瀬さんが最初に言った、参加型の議論とも絡んで。そういう形で、神様みたいな偉い人がプランナーとして、うまく調整をしてやれば、世の中うまくなるんだというような幻想は、世界的には、もう1970年代ぐらいには終わってるんです。そういう形ではできない。それに代わるべきものが何かあって、参加型だということになって。特にアメリカを中心として、そういう形での新参加による新合意というものこそ、都市計画

の基礎だということになる。ところが、そういうことが議論される、更にその背景に、市民参加を担保するような専門家（特に単なるフィジカルな専門家ではなくて法律とか行政に詳しい専門家）とか、そういう人たちが市民運動を、一緒になって動いた上で、行政を動かすような構造にならないと駄目なわけです。ところが、どういうことが発生したかという、日本では参加型の都市計画っていうのを最初にキチッとイデオログとして出してきたのは横浜の田村明という人なわけです。田村明さんの思想は、どういう思想のもとにできたかという、飛鳥田さんという横浜の社会党の市長が、非常に強い支持率を持って、これから高度成長をしようという時に、横浜をどう引っ張っていかうかと考えた時に、彼は全面的に田村明を信頼して、田村明に全権限を与えて、横浜市を変えようとした。田村明っていう人も、これまた不思議な人で、（もともとは、建築の丹下研の出身なんだけれども）東大の法学部を出ていて、そういうノウハウを習得した上に、どうしたかって言うと、今どうも都市計画の仕事をやって、面白くなりそうだっていうんで、日本生命か何かに入って悠々としばらく時間を過ごしていた。そのうち、俺の本職はやっぱり都市計画だということになって、浅田孝という人に弟子入りをして、結局、その当時の都市計画のノウハウの最先端である高山英華と丹下健三の知恵を吸収した上で、そこで、浅田孝のところまで横浜市役所の仕事をして、飛鳥田さんに見込まれて、横浜市の企画調整局長に入ったわけですね（最初は室長になるんだけど）。そこで彼が考えたことは、日本の都市計画は、分野横断的な都市計画になってない。だから、総合性がない。それから、デザインということをちゃんと考える風土がないから、文化性がない。そういうことをちゃんと横浜では取り戻そうとして、都市デザイン室というのをつくって、いろいろな事業に都市デザイン室を介入させて、デザインの質を変えるだけではなくて、そういう形でのトータルなデザインコントロールというのをやってくということ、彼は始めたわけですね。ところが、もう一方で、彼はその当時の飛鳥田さんの意向を受けて、基本的にその当時、どういうことが起こったかっていうと。日本の大都市圏の中では30パーセントの人口が既に社会党政権の下、つまり左翼政権の下にあって、基本的にそういうところをベースとして、国の構造自体を変えていかないとトータルなまちづくりみたいなことはできないし、トータルな環境行政もできない。実は横浜っていうのは、環境行政でも最先端ですし、市民参加でも最先端なんです。そういうことを飛鳥田さんがやっていて、その全面的な信頼を受けてやったのが田村さん。田村さんがやったことは、トータルなデザインシステムをつくと同時に、参加型の意思決定システムをつかって、横浜の元町や伊勢崎という所から始めて、さまざまな住民合意形成を経ながら時代のプリンシプルをやっていくという構造をつくったわけです。ただその時に、基本的には、

丹下さん、高山さんが代表するような日本の都市計画の思想、しかもそれは、世界の思想を反映したような思想を、横浜という地域で実現するという意識のもとに進めた。けれども、残念ながら、日本における参加型のシステムは、そういうような総合性の問題とかを度外視しちゃって、横に置いちゃって住民参加をして、合意形成をすれば、それがいいんだというような、単なる参加型の話になっちゃった。そうすると、どういうことが起こるかっていうと、膨大な税金を使って実際の都市を動かすような構造には手を触れないで、自分たちの身の回りで何とかできることだけをやるような話、ドンドンしちゃうから、参加型の都市計画というのは、矮小化した都市計画になって本来の都市計画からドンドン外れちゃう。ところが、残念ながら、東京大学をはじめ、非常に多くのそういう偉い先生方が、そういう矮小化した参加型の話ばかりしちゃって、全体としてのまちをどうするのかという、そういう問題から遠ざかっちゃうということが、今の最大の問題になっている。そのことが、今の黒瀬さんの話の第1番目に、あるわけです。我々は、**そういう問題に対して、もう一度横浜がかって1970年代にやったようなことも踏まえて、何ができるのか、どういうふうにやっていくのかということ、現場から立て直していかなきゃいけない**って問題が、第1の問題です。

第2の問題は、黒瀬さんの2番目の問題に絡んでいて、これから起こってくることってのは、日本の人口は、明らかに対称形でドンドン下がっていく。基本的に人口が減って、空き家はドンドン増えていくという構造の中で、ストックがドンドン駄目になっていく。しかも、今おかしなことに、今の財務省の方針で、上物が残ってる限り固定資産税は、それほど負荷がかかってこないんだけど、更地にした途端に固定資産税が6倍近くなっちゃうみたいな構造になってるもんだから、朽ち掛かった建物が膨大に残ってるような、そういうような住宅資産がドンドン累積しつつある。ところが、相変わらず、成長型の発想しかできていないから、日本の住宅政策というのは、まだ造る方にしか議論がいてなくて、今のストックをどう変えていくかっていうことを議論しなきゃいけないはずなのに。ところが、それをまともに議論してないわけです。ですから、先ほどもアメリカの具体的な事例として、隣の敷地を買うといった話が出てきましたが、そういうことをいろんな所でやろうとしてるけれども、なかなかうまくいかない。うまくいかない根本には、基本的には成長とか、そういう概念でしか物事を考えていない60年代の哲学に沿って、今だに政策構造が立っている。

都市計画や住宅政策の構造を、成熟型時代において、私は「開発」とか「成長」とかいう概念の対抗概念として、「**間引いて戻すというやり方＝間戻（かんれい）**」という言葉を造って、**そういう思想に沿って物事を考えていかなきゃいけない時代に入っている**と思うんです。今住宅政策について、ストック型の政策

に切り替えようという勉強会も、東京で新たに始まっているわけですが、そういう根本的な議論をキチッとしないと、現象として起こってきているような空き家化に対応する対応策というのは恐らくできない。部分的に幾つかそういう形での成功例ができたとしても、これから起こってくることは、膨大な空き家化の中で、なおかつ、空き家になる必然性が非常に高いような住宅をドンドン造っているというような構造を、どこかでキチッと直さなきゃいけないんだけど、それができてないんじゃないかっていうことを、問題提起しておきたいわけです。

パラダイムシフト、多様化する価値観、危うい計画基準、答えはない、「全般的な制度の解体がおきている」、求められる意思決定システムとは。

榎本 僕は、今、時代の境目というか、パラダイムシフトのところに立ってるんじゃないかと、すごく思っています。価値というものをどう捉えるんだろうっていうのが、僕の中ですごくいつも悩むところなんです。というのは、僕らが学んできた都市計画は、人口が右肩で増えていて、その人口をどう適切に、どう分配するかということが重要でした。そしてそこから上がってきた税収をいかに全国にばらまくかという、その分配の議論が中心でした。参加型のまちづくりも、ある種、合意形成のツールとしては、みんなの所得は2倍になりますみたいな世界できてるので、ある意味、みんな同じベクトルで、みんな同じ方向を向いてきた中での合意形成という意味では機能してたんじゃないかなと思うんですね。でも、成長が止まって、僕は、「成長」の対義語は「成熟」だと思っていて、決して「衰退」じゃないと思うんです。成熟化した社会って、価値観も多様化していると思うんです。そうすると、同じベクトルでみんなが同じ価値を見ているということが、少なくなるだろうと思っています。その時に、みんなの価値を統合して、都市計画という形に落とし込む作業を、誰がどうやってやるんだろうなっていうのが、全然、全く未知のことで、まだ分からないんです。価値というと、途端にクオリティー・オブ・ライフを数値化して、「みんな、こんな生活像の方がいいでしょ。」みたいな話をするんですけど。またそれも、ちょっと違う気がして。これからの20年、30年、僕らは価値をどう捉えていったらいいのかなというのを、率直にお聞きしたいと思います。

黒瀬 ちょっと関連して、いいですか。

非常に卑近な話なんですけれども、広場とか公開空地をつくる時に、計画標準の中で一番評価が高いところを狙って民間は、一番容積率が取れるように設計しているんです。しかしながら、今の多様化の話と一緒に、タバコを吸う人にとっては喫煙所が

あると最高だし、ランチを食べるんだったらテーブルが必要だし、でも子連れだったら喫煙所の近くは嫌だし、例えば都心だと警固公園のような所とそうでない所があって、いろんな場所があるわけですよね。いろんなニーズがあって、いろんな場所があって多様化すると、今までの計画標準とか「平等」な評価みたいなものが、非常に危うくなってきているのではないかと。どうやって多様な価値の幅を広げられるか。全体の量は足りてるじゃないか、むしろ多様なニーズに答えることに議論があるべきじゃないか。それも含めて、お話し願えたらなと思います。

蓑原 今、非常に本質的な問題が指摘されたのですが、2人とも80年代生まれなのに、にもかかわらず、相変わらず近代主義の罫に掛かっている。要するに、既にある共通の目標があって、それは予定調和的に発見できるというような考え方自体は、今の教育の結果かもしれない。けれども、“ある正解”があって、それを見付けることが問題だということなんだけど、実は、“正解”なんかありませんよ。正解がない時に、どうやって正解を見つけ出すプロセスを作り出すか、ということが問題であって、そのことを意識しない限り、何か正解があるのを見付けると言っている限りは、偏差値型の教育を脱しきれていない。そういうふうには、ならないはずなんです。だけど、そういうことを抽象的に言っただけで、具合が悪くなれば、実際に実践的にその場でみんなと一緒にやってみる。その関係者と合意が取れるのか、取れないのか。それが実際に今の社会資質であり（特に経済資質の中で合理的に動けるかどうか?）、そういうことを一つ一つ具体的に実践しながら、着実に確認していかない限りは、そんなものは最初から分かるわけがない。だから、それは覚悟して、そういうふうには臨まざるを得ないわけです。ただ、自分がその時に、そこに介入する立場を、どういう立場として考えながらやるかっていうことは、本当に腹を据えてやんなきゃいけない。だけど、やっぱり、そういうことでしかない、僕は思っていて、今の質問に対しては「答えが出ない。」「探せ!」ということしか答えはないということですね。

水谷 答えがないっていう話と関連して。今、福岡市から、市街化調整区域になっている能古島ですが、やっぱり人口が減っていて、空き家も増えているという状況の中で、「市街化調整区域を緩和する制度が最近できましたので、それを住民参加型でやってください。」というお達しが来ています。具体的にどういうものかっていうと。法律に詳しい方は分かると思うのですが、50戸連たんという既存集落の規定の中で、市街化調整区域に線引きされる以前から形成されている集落の中であれば、開発を許容するという既存宅地ではない雑種地や田畑等を、宅地にしていいですよっていう福岡市の制度です。それに開発する用途を住民の中で相談して許容・制限できるようになっている。

一応、市からの要請を受けて、「共同住宅OK?」、「貸店舗、賃貸住宅もOK?」といった協議を能古島でやっています。ただ、この協議の場に、市役所からの要請で利害も絡むような専門的な話をしているのに、コンサルタントが付いていません。たまたま僕がいるからなんとか話が進められています。ちなみに、10年くらい前の話ですが、僕も利用していたのですが、神戸にはファシリテーター育成制度というものがあって、都市計画家やコンサルタントの専門家になりたい人は、神戸市からお金が出てコンサルタントからの給与を補助してくれます。現場で実務を学び、人材を育てることで都市計画のコンサルタントをドンドン増やしていくというものです。極端に言うと、各地区それぞれにコンサルタントが1人必ず付くような仕組みを神戸は作ってやってたんです。福岡にはそれがないですね。僕がたまたまいるから、僕が都市計画の理解を深めたり、住民の合意形成も僕からこういうふうに進めていきたいと思いますと提案をしたりしています。

重要なのは、この制度で確かに新たに家が建てられるようになるかもしれないけど、30年後はまた空き家になるっていうことを、かなり気をつけなければならない。かなりしつこく僕から自治会にずっと言っていて「今の空き家さえもどうにかできないのに、30年後には空き家がさらに増えて管理できない」という話をすると、「空き家は残るが、島外からの転入も増えるのだから、何もしなければいい。」みたいな身も蓋もないような話も出てきたりする。これは**住民の自助努力しかない。要は、呼びかけだったりとか、極端に言うと、空き家にさせない文化をつくるしかない。**30年後、50年後、100年後のサイクルを見据えながら状況は常に変わっていくことに対して自分たちがそれに対応するんだ。常に対応していくんだっていう文化を、まちに創るしかないというプロセスを議論しながら取り組んでいます。

結論ありきなんじゃなくて、状況が常に変わることを前提に、住民が専門家の力を借りて対応していくような仕組みが、やっぱり求められてると思います。

養原 今の話は、幾つかのレベルの問題なんだけど。最も基本的な疑問は、一体誰が本当にそういう宅地開発を求めているかということ。その合理性は何かと言えば、宅地開発を求めているのは、単に土地を有効に利用して金儲けをしたいという地主としての農家の意向であって、それは、何ら住宅事情との関係がないし、都市計画とも関係がないわけですね。ただし、そういうメカニズムっていうのは、現実の社会経済的メカニズムとして、キッチリあるから、そういうものを受け入れながら、何ができるかっていう話になるわけです。その議論っていうのは、さかのぼると、市街化調整区域とか市街化区域を決めたやり方そのものの問題もあるし、市街化区域や市街化調整区域を

決めた時には、都市計画をやった側（建設省の側）からすれば、市街化調整区域というのは、計画的に開発できる余地だというふうに考えたにもかかわらず、農水省は、たちどころに農振地域を主張するというように、網を掛けちゃって、そこは自分の領土だというふうに旗を立てて、できるだけ開発させないようにする。しばらくの間は、うまい形に農水省のその形が動いて、かつ、農水省の事業なり補助事業なり、農業雇用組合のサポートとか、そういうものが働いてたから、そこでバランスが取れてたんだけど、そのバランスがドンドン、ドンドン取れなくなっていったのは、要するに食料管理制度に始まり、食の外国依存とかというようなことが始まっちゃって、結果的に農地の管理をする農家という概念ではなくて、地主である農家というふうに転換しちゃった実態を、農水省は受け入れちゃっている。逆に言うと、農水省がそういう分散型宅地化を推進するという制度を積極的に作り出しちゃっている。例えば、土地改良事業で「非農用換地」というのを作り出してそこで住宅を造っちゃう。すると、都市計画側では、実は抑えたいという所を農業事業でやっちゃうなんてようなことが始まっちゃって、そういう形で、**全般的な制度の解体が起こっちゃってる。**それで、今の問題提起の答えは、本当にその場その場で短期的な最適解なんてあるかっていうと、今のような形で実際に土地を売りたいって人がいて、どういう根拠で何かを抑えるとして、その根拠自体が非常に弱くなってるから、それは難しいなとなった時、どうするかっていう話。

もう一つは、今の制度そのものを抜本的に変えて議論し出すとすると、今の水谷さんの話の裏には、新しく農地を潰してやるのではなくて、何で古い住宅ストックをちゃんと流通させてやらないんだということの裏腹の政策があるということ。流通を強化することによって、住宅の新しい需要に応えると同時に、農地として手放したがる人、どういう理屈のもとに手放さなくちゃ駄目だ、あるいは、農地から転換できないっていうふうに切り替えるのかということを議論しなきゃいけない。その問題は、恐らく農業政策だけの問題ではなくて、環境政策の問題とか、いろいろな福祉政策の問題とか、ある種の農業福祉みたいなものがあるのかどうかですね。

そういう問題を含めて、**トータルにそういう意思決定システムを考え直さないと駄目だ**ということがある。それがちょうど**1960年に都市計画法ができた時に、都市計画と農地との問題をどう考えるかということと同じようなレベルで考え直さないと、恐らく最適解はできない。**ただ、現場で戦ってる人にそんなこと言たって、駄目だから、現場の話ではないところで、そういう議論をキチッとやる。やった上で現場では、どうするかっていうと、今のような力のせめぎ合いの中で、恐らく合理的な判断っていうのは、本当にプランナー次第で、良心的なプランだけでは非常に難しいでしょう。悩んじゃうと思うんですよ。

僕なんか実際そういうとこに、もう恐らく入りきれないと思う。それでもトータルにキチッと考えなきゃならないのが我々専門家の役割であり、アカデミズムの役割だと、僕は思っています。

総量規制では答えはない。人本位の思想に切り替えていかなければいけない。

黒瀬 今のことと関連して。地区スケールで言うと、確かに住民参加で意思決定というのは、あるシーンでは非常に安定的な時は有効かもしれないんですけども、大きく総量が変わったり、もしくは地区スケールの決定が都市スケールで重なっていたりしたときに、不合理が起きる可能性はないか。成長の時は総量がドンドン増えていくので配分的な政策をやっていた。でも、最近は地区スケールで何か決めて、その寄せ集めで、マスタープランでいいんじゃないかというような考え方もある。でも、本当にマスタープランが寄せ集めのままで大丈夫なのかという疑問もあります。特に自治体の経営ですよ。経営という意味で、特にインフラの維持費の面で本当に大丈夫なのかと。でも、なかなかそういうようにならずに、それぞれの地区で幸せだったら、それでいいですよと市役所が言ってしまう、そういう構造だけで大丈夫なのかなっていうか。そこには一歩引いて、住民意見だけを聞いていけば、専門家は要らないじゃないかというふうになっちゃいますよね。

蓑原 でもね、そう言った途端に、じゃ、本当にあなたは、総量規制の合理的根拠が持てますか。例えばですよ、かつて、もし、総量規制というものをやろうとしてたら、我々が市街化区域に線引き規制を始めた時には、これから人口増が急速に起こるだろうと。そうすると、インフラのない所に人が入ったら困るから、インフラを作らなきゃいけない。そうすると少なくとも、道路、下水、公園だけはやりましょうと。それを10年以内に計画的にやりましょうというのが、都市計画法の精神だった訳です。だから、基本的には、コンパクトにそういうものをつくるという目的があったんですね。ところが、今のように人口減少時代で、どういう根拠に基づいて、総量規制をやれるんですかね。

黒瀬 一つ事例を紹介すると、デトロイトとかフリントみたいな所は、人口が減ることによって税収が減ることは、見込みが見えていて、その税収で維持できるインフラはどこまでかというところ、当然今までの人口の半分に減っているんだから、インフラも半分に減らさないと維持できないというところが、一つのフレームになる。ただですね、それは・・・。

蓑原 だけど、それはどういうフレームなんだね。人口が半分になった時のインフラは？「人口が半分になったから半分のインフラは要りませんよ。」と言った時に、それが具体的なアクション、公共アクションになり得るのですか？

黒瀬 公共アクションとしては、結局は、人口が極端に減ってる地区の住宅新規立地を規制するという、土地利用の規制アクションになる訳なんですけれども、その合意形成がとても難しい。立地適正化計画でも「市街化区域の中だけで、居住誘導区域に入れません。」となると、住んでいる方は「これ、どういうことですか？」という話になるわけです。その合意形成のところで、実際大変になってくるのは、住民の方々はこれから自分たちが市街地から切り離されるかもしれないという不安を抱いている。

でも、そういう所に「ここで生きていいんですよ」と逆に言ってあげられる。例えば、「従来の水道でなくても、ここだと井戸と宅配の飲料水でやっていけますよ。」というような別の生き方を示すことができる。今まで完全に都市に一体じゃないと住み続けられないという不安を持っている人がいたとして、人口が減った後の別の備え方を、地域の生活像を提供することに力を入れる時じゃないかって思うのです。



蓑原 だけど、今のような形で公共サービスを切りますよと。その公共サービスっていうのが、インフラに関わる限り、電気とか水とか、切れますかね。しかも、今の時代に切ったところで、意味があるような切り方になりますかね。

それから、もう一つ。

徹底的にそれをやるなら、恐らく、公共サービスとして、福祉サービスとか、その他の公共サービス一切をそこでできませんよみたいな話ってのは、観念的にはできるけど、そんなこと実際できないでしょ。そうすると、総量規制の根拠って一体何だって聞いに、答えはないんじゃないですか。

黒瀬 非常に“疎”に住んでる地域に対して、非常に“密”に住んでる地域が、かなり相互再配分をしてるわけですよ。インフラの維持費に関しても。人口密度が高ければ、当然、イン

フラの一人当たりの維持費はすごい安い。例えば、水道料金変えていいというような議論ができるのか。

養原 だけど、実際問題としては、固定資産税とか住民税とか、そういう形で仕切りを作っちゃって、やっぱり過密型で、地価の評価があるところは高い負担を背負ってるわけでしょ。そういう郊外でやってる連中は、薄い維持負担しか持ってませんよね。そういうことに対して、税金払ってる連中がみんな反乱を起こして、もう駄目だと言えば別ですよ。だけど、そういうふうな構造にはなってませんよね。日本の構造社会の中では、そうすると、そういう自治的な意思決定ができないという構造の中で、国の法律を根拠として、ある種の合理的、法的な合理性を持って、コントロールする根拠なんていうのは、あり得ないんじゃないですか。

黒瀬 なので、私は別に総量規制が絶対できると言ってるわけじゃないんですけども。**自治体が破綻した場合、要は、維持管理できなくて破綻するような危機に迫った時に、どういう選択ができるのか。**別に国の政策でやるべきだと思ってないんですけども、例えば、夕張みたいな状態になった時に、どうやってそこに住んでる人は自分たちで自分のまちを守る計算ができるのか？ そういう非常に厳しい局面に追い込まれるような自治体が、福岡はないかもしれないですけど、これから出てくるんじゃないか。

養原 だけど、自治体は、あなたもご承知のとおりで、現在の日本の地方財政っていうのは、3割財政もないぐらい、地方で実際にあげてるものはなくて、交付金とか補助金で持ってるわけでしょ。自治体の中でそういうことをコントロールするっていう仕組みが、もともとないんですよ、日本の自治体には。だから、今のようなことを考えるとすれば、制度的に、保護政策的に、やはり国家社会主義的な観点で、国がキチッと総量規制になるものとして割り付けるみたいなことを考えない限りは、できないんだけど。そんな根拠は今はないから、国はできないでしょって。そういうことなんですよ。

何が言いたいかっていうと、要するに、ことほど左様に人口が減り、経済成長ではなくて経済が成熟化に向かっている。しかも、その成熟化の過程の中で、恐らく、これからのコンピューター化と情報化の過程の中で、通常の定期雇用っていうのは、むしろ、ドンドン減っていく可能性がある。そういう構造の中で、どうやって人の生活をハッピーにさせながら、空間構造をちゃんと維持したり、あるいは、今よりも向上させようとするようなことが可能なのかというシナリオを考え出さなきゃいけないわけです。そういう問題は、単に空間の末端的なことだけを議論しても、もう済まなくなっちゃってる。例えば、今、私は

十津川という所で、人口がかつては1万5000人ぐらいいたんだけど、今はもう4000人を切っちゃってる所で仕事をしてます。そういう所で起こってることというのは、高齢化率が40パーセントを超えちゃったような所で、どうやって、そういう村落をこれから維持させていくかっていうような議論になるわけです。そうすると、そういうところの議論っていうのは、たちどころに住宅政策と福祉政策と教育政策、みんな絡んでくる。そういうことも、トータルに議論せざるを得なくなってるわけですね。そういう領域の中で考えないといけない。そういう領域をトータルに考えた時に、総量規制的な概念ではなくて、基本的には、そこに住んでる人がこれからどのようなライフスタイルで、どういふふうに持続できるのかというふうに、空間本位制とか、例えば、施設本位制ではなくて、人本位制に物事の思想を切り替えていかなきゃいけない。そういう人たちがこれから生きながらえ死んでいく。それから新しく若い人が入ってくる。そういう過程の中で、そういう人たちがどういふような幸せな生活を送り、いい空間をできるだけやってくかっていうふうに考え直さなきゃいけないわけです。だから、土地利用計画とか総量規制とか、そういうような形での、いわば**空間本位制みたいなものから脱却して、人本位制みたいなものに、考え方を変えていかなきゃいけないんじゃないかってのが、基本にあるはず。**その基本が、実は守られてないが故に、東北の大震災の後の被災地では、残念ながら、非常にうまくフォローアップできてない。十津川の場合、震災ではなくて、大風水害がものすごく（山の崩壊、深層崩壊が起こっちゃって大変だったんだけど）、それでも、実際に被災住宅として復興住宅を仮設で造らなきゃいけなかったやつは、たかだか数十戸で済んじゃった。その中で、本当に新しい公営住宅で、復興住宅と引き取らなきゃいけなかった人たちは、十何戸で済んじゃった。その範囲で済んだから何とかあったけど、その済ませ方を十津川の場合は、はっきりと意識して、将来の福祉的な問題まで含めながら、どこにそういう住宅を立地させるか。住宅の建て方も、国が勧めるようなプレハブなんていうのは、一切使わなくて。地元の十津川材を使って、十津川の木工さんを使って仮設住宅から始めて、復興住宅もやるということをやった。それが終わった時には、次に、今度はどうやって、外側に逃げてしまっている福祉対象になるような高齢者を、どうやって十津川に引き止めて、最後に住み終えてもらうかっていうことをやろうとしている。そういうことをトータルに考えざるを得ないし、十津川みたいに顔が見える場所では可能性があるんだけど、「日本のどこでも**本当はやらなきゃいけない構造になっていて、今までのような空間型の発想ではない、人に着目した政策をどういふふうに組み立てるかを、考え直さなきゃいけないんじゃないか**」っていうのが、僕のメッセージなんです。

これが一筋縄ではいかないのは、現場の具体的な地区レベル

での人本位制が、広域的、国レベル、地球レベルにおける人本位制と必ずしも直結しないかもしれない。しかし、地球レベルでの人本位制と地区レベルでの人本位をすり合わせる事が避けられなくなってきている。これをどう解決するのか、これは地方分権制度とグローバリゼーションの間に横たわる根源的な問題で、それが今、世界の政治の上でも噴出してきている。

水谷 政策ってなると、非常に難しくて。僕が住んでいる能古島では、島に住みたい人たちが順番待ちの状態なんです。でも、島に住んでいる人は確実に歳は取るし、家族構成は永遠のものじゃないから、子どもが出て行ったり、戻って来たり、亡くなったりとか、生まれたりとか。それぞれの住宅、それぞれの生活の状況が変わります。そういうところまで想像できるかどうかっていうのが、確実に住民に求められていると思います。その時に、今の都市計画の制度の中の建築協定だったり、地区計画とか、制度がいろいろありますが、役所はただ単に負担を担いたくない場合もあるので。じゃ、どうするかって考えたら、**その仕組みやシステムを行政に任せるのではなくて、住民の中で文化として創るしかない**というふうに僕は考えました。多分、さっきの十津川の話もそうだと思うんですけど、意外と文化って守るとか伝統を次につないでいくみたいな話はよくある話なのですが、「創る」という話はあまりありません。その「文化を創る」ということや、**これから都市計画家やまちづくりコンサルタントが本業もさることながら、自分が帰った時に、地域とか、生活の場所で文化を創造していくような動き方というのが必要になってきているのかな、**という気がします。

蓑原 今、非常に重要な指摘があったのは、今、僕らが話している人本位制みたいなことを考えた時に、ドンドン縮小型でしかイメージできなくなっちゃうとすると、実は、福岡みたいな場所では、間違いが半分ぐらいある。何故かっていうと、要するに、人口が減ろうとどうなろうと、それから、地球社会の中でどういうふうな動きがあるろうと、場所場所によって、非常に成長性が高い場所っていうのはあるし（明らかに福岡のポテンシャルっていうのは、成長性が高い場所なんです）、だから他の所が減っても、福岡は増えてくる可能性がある。まさに能古島なんていうのは、これから注目されて伸びてくる可能性があるかもしれないんです。そうすると、全体として、そういうような空き家が多数発生して、間戻型になってくような社会、間引いて戻ってくような社会ではない社会っていうのは、どういうふうに構成しながらやっていくかってことは、実は日本とか都市の戦略においては非常に大事だというふうに思ってるわけです。

非常に悲しいんですけど、僕はアイランドシティの開発計画のある時期に関わったことがあって、その時期に議論していたのは、福岡っていうのは東アジア地域の中で、ものすごくいい

ストラテジックなポイントに立地していて、アイランドシティっていうのは、そういう場所を東アジアの中心地としての場所として形成できる可能性を持つてる場所だと思ってたわけです。その考えは、その当時から議論してたわけではなくて。福岡の前の市長だった桑原敬一氏（在任期間：1986年～1998年）が、そういうことをキチッと saying いて、桑原さんの時代の福岡は、まさにアジア戦略というものを見据えて福岡を考えてたから、「百道」の開発なんていうのは一気に変わったわけですよ。

具体的な話として、私がそれを痛切に感じるのは、「百道」の埋め立てが完了して、その用途地域の図面が出てきた時に、私は建設省の都市計画課の担当官として図面を見たわけです。私は修猷館で学んでいましたから、埋め立て自体が個人的に非常に嫌だったのです。けれども、出来るとすれば、少なくともその埋め立て地はもうちょっと福岡の都市構造をキチッと直すような構造であるべきじゃないかと思ってました。しかしながら最初に私のところに上がって来た図面は、普通の住宅団地の図面でした。全部、平行配置型の住宅で埋められるような図面だったんですね。僕はそれに対して、ある種クレームをつけたけど、そんなことは一係官のクレームで動くような話じゃない。どうにもならなくて、悲しいなと思ってたら、桑原さんが市長になって、途端に全部それが白紙に戻って、今の「シーサイドももち」みたいな計画になったわけです。それによって明らかに福岡は、多心構造に向けての一つの大きなステップを踏めた訳で、「シーサイドももち」の影響力がすごく大きかったと思う。それから「シーサイドももち」をやった時に、「百道」の海岸についても新しくちゃんとした施設を造って、海岸の魅力を付加するようなことも、ちゃんとやれた。そういう意味では、福岡っていうのは、桑原市長が掲げたアジア戦略の思想、理想があって、そういう方向で動けば、非常に動ける可能性があって、**福岡は、これからいろんなポテンシャルがあって、単に成熟化過程ではない成長過程で在り続けながら、アジア全体を見据えながら考えなきゃいけない場所だ**と思っている。そういうことを考えると、今の能古島なんかの計画も、ものの考え方が変わってくるのかもしれないですね。

水谷 ちょっと興味があるので伺いたいのですが、水谷穎介は「シーサイドももち」のプランをやることになったキッカケとか、ご存じですか。僕は聞いたことないんですけど。

蓑原 僕は、よく知らないんですよ。だけど、水谷さんと、もう一人、誰だっけ。

水谷 宮脇さんですか。

蓑原 宮脇檀さんね。あの2人で入って、随分と「シーサイド

もち”の全体計画は非常に素晴らしくなった。しかも、住宅地は一戸建て住宅地としては、今や福岡の中ではトップクラスの住宅地になりましたよね。ただ、僕は、ESPLANADE っていう雑誌の中でずっと対談シリーズとかやってて、その時に、水谷さんと宮脇さんがやったプロジェクトについて、ちょっと批判的なことを言ったことがあるんですよ。その当時、既に神戸のポートアイランドが出来上がっていて、「ポートアイランドの考え方からすると、もうちょっと新しい都市デザインの在り方があったんじゃないか？」というようなことを、非常に脳天気にはしゃべっちゃって。実は後になってから、水谷さんと宮脇さんが、ものすごくそのことで戦って敗れたということが分かったもんだから、大変申し訳なかったなと思ってるんです。でも、明らかに“シーサイドもち”における宮脇さんと水谷さんの提案は、“百道”の環境を非常に良くする方向に動いたんじゃないかと思いますよね。

福岡のこれからの都市戦略は？ 福岡は国際的にいいポジションにある、または“総合的で主観的で生理的”に選ばれる。

石橋 一つ前の蓑原さんの話の中で、福岡の優位性とか、福岡の今後のためにどう考えたらいいかっていうことに関連して。今、『福岡地域戦略推進協議会』っていうのがあって（榎本さんも入られてますけど）、その議論の中で、福岡が東京を向いててもしょうがないので、「アジアに対して福岡が都市の成長の仕方として、どう売り出せるか？」みたいな話をする機会に参加していて、その中で、私も福岡の歴史について1回お話しさせていただきました。それで福岡がこれから発展するためには、都市（福岡）の辿って来た成長の過程をアジアに投げ掛けていくってというような話について、蓑原さんはどう思うふうにお考えでしょうか。

蓑原 幾つかの議論があるんですけどね。まず一つは、1980年代、中曽根民話が始まった頃に、何が起こってたかっていうと、経済でのグローバリゼーション化がはっきりと意識されたこと。その中で、ヨーロッパについてはロンドンが中心になるだろうと。南北アメリカ社会については、ニューヨークが中心になるだろうと。アジア社会がこれから、中国も立ち上がって来る、インドも立ち上がって来る中で、どこが中心になるかという、僕はやっぱり日本が中心になるだろうと言っていた。期待も込めて、1980年頃の東京湾の計画に高山委員会っていうのがあって、高山先生はそういうことを議論してたわけですが、でも、東京は明らかに、グローバルに東半球のハブとして機能するかもしれないけども、少なくとも、このアジア地域の、この領域について言えば、東京なんかより福岡は、はるかに良識的にいい

ポジションにあるわけですね。だから、例えば、私の甥は、今、ボルボのトラック部門の世界企業に働いていて、その本社がイエテボリ（スウェーデン）にあるんです。彼は東京で、アジアのボルボのトラック工場の施設部門の総責任者をやってただけで、「東京は、非常に具合が悪い。」と言うんで、シンガポールに行っちゃったんですね。今もシンガポールから総責任者をやってるんですけど、もし、日本の構造がもう少し開かれていれば、シンガポールまで行かなくて、福岡でやれたかもしれない。何故、それがうまくいかないかってことの一つは、やっぱり日本の財政政策とか、日本の移動性を阻止するような移民政策とかを考えると、やはり日本の福岡よりシンガポールの方が働きやすいということになる。

1980年代に高山先生がそういう形でのアイデアを出す時に、僕らが一生懸命夢見たのは、基本的には日本人の力をもってすれば、必ずや第3の金融センターになり得ると。しかも、それを媒介として、中国だろうとインドだろうとインドネシアだろうと、日本との密接な連携のもとに、共存共栄できるというような意識でいたんだけど、それが見事に失敗した。実例としてはっきりしてるのは、例えばその当時、森ビルが開発したアークヒルズには、世界の金融機関の非常に優秀な連中が来てたんです。というのは、日本の80年代における中曽根民活に対する期待があって。そういうことが日本をベースにして、グローバルな展開ができるだろうと思ってたわけです。ところが、残念ながら、日本に来て数年経って見たところが、日本では金融型のいろいろな活動が自由にできないということが分かっちゃった。

あと、それから、非常にまずいのは、そういうような優れた人材が外国から来るってことは、実は、家政婦さんとか家庭教師とか、そういう類いの人を引き連れてくるんだけど、そういう人にはビザが下りないんです。日本では、そうすると、そういういい人材も来なくなっちゃう。そういうことを含めて、日本の開放政策ってのは、キチッとできてない。（今頃になって、そのビザを何とかしようとしてるけども。）例えば、**福岡がこれから国際展開しようと考えているならば、単に世界と戦うだけじゃなくて、まず、霞ヶ関と戦う必要が出てくる。**そういうことを実際は、桑原さんがやったわけですよ。政府と戦っただけじゃなくて、桑原さんは大企業のトップの所に行って、「福岡支店長の決裁権を増やせ。」「福岡で判断できることの方があるんだから、福岡でいろいろ判断できるようにしろ。」というようなことをやってくれたから、福岡の支店の力が非常に強くなって、福岡の活性化に非常に寄与したというようなことが、実際あるわけ。だから僕はこれから、やっぱり福岡がもし、そういうアジアを見据えた政策展開を考えようと思ったら、**全体の制度的な金融的な問題とか、福祉的な枠組みとか、そういう全体の枠組みも踏まえながら、うまくそれを直しながらやっていく**

というようなことをやらないと、うまくいかないかもしれないというふうに思います。でも、僕は、**福岡にはチャンスがある**と思っている。そのチャンスの中身がどうかっていうのは、金融の問題もあるかもしれないけど、恐らく、いろんなハイテク産業をどのように持って来るかとか、**いろんな他の選択肢はあるかもしれないけれど、そういうことを考え得るチャンスがある。そういうトライをするチャンスがあるんだと、僕は思ってます。**



黒瀬 確かに、福岡にそのチャンスがあると思うのだけど、結局、金融センターになるのか、シンガポールを目指すのかと言えば、僕はそうでもないと思う。最近、福岡にどうしてアジアの人が沢山来てくれるようになったのかと言えば（勿論、近い・安いというのも、あるんでしょうけど）、日本らしい都市生活が一番身近に見える場所だということがあるんだと思うんです。東京では、結構難しい。これは私の韓国の友人なんですけど、「東京は1回行ったらもういいんだけど、何度も来て、自分があたかも住んでるような感覚になって楽しめるのは、実は福岡なんだ。」という話を言っています。そういうことを考えると、いい企業に立地してもらおうにしても、非常に優秀な人に来てもらうにしても、金融センターとしてタワーオフィスがあれば良いのではない。そうではなくて、「**福岡なら住んでみたい。こういう都市だったら、自分もこの都市生活を楽しめるな、住めるな**」っていう感覚を、**いかにアジアの人に持ってもらうかっていう点が、実は根幹だと思うんです。**ですので、東京が80年代に目指していたような埋め立て地を造って、超高層ビルがあって、世界の何処でも快適に同じ生活が送れますというタイプではない、何か別の価値を生み出していかないといけない。既にそういう世界一律の都市生活を提供している香港とかシンガポールには、勝てないんじゃないかなという気がしています。

蓑原 今の指摘は、東京オリンピックを前にして東京の魅力をどういうふうにねじ込むかってことにも関連するんですけどね。例えば、“おもてなし”っていうことで売り込もうとして、今一生懸命やってる。それは確かなんです。明らかに、どんなに中

国が頑張ろうと、インドが頑張ろうと、日本みたいな優しいおもてなしをする文化を持った国なんて、そう20、30年で追いつけるわけじゃないから、それは確かです。でも、僕はそのレベルで言ってる限りは、日本のスイス化にすぎないと。要するに、観光立国で本当にいけるのか？今、しかも、世界に向かって、そういうグローバルなネットワークを張ってる日本が、そんなおもてなし型で、引き込み型でいけるかっていうと、僕はやっぱりいけないと思うんですよ。だから、金融も含め、ある種の世界戦略を持った新しい産業をどういう形で興すかが、必要になってくる。例えば、福岡でアイランドシティをやっていた頃に議論したのは、今非常に有名になってきたダボス会議。あのダボス会議の支店っていうかな、ブランチがアジアに出てくるっていう話があったんですが、実は、大連がそれを取っちゃったんですよ。本当は、福岡がもし、日本がもう少ししっかりしてたら、大連なんかには取られなくて、ダボス会議のブランチは日本につくれたかも、福岡につくれたかもしれないと、僕は思っています。

ああいうのは、単なる観光産業を超えて、もうちょっと大きな、いろいろな動きを巻き起こす渦だと思ってるから。そういう**新しい世界戦略を持った産業政策を作らないと、単なる日本が持つてる“優しさ”とか、“おもてなし”だけで、これから1億人を食わせるかっていうと、食わせられないと僕は思ってます。**

水谷 今の話はすごい重要な話で、住みたいっていう話はあるかもしれないけど、仕事がないと多分住めない。それでやっぱり産業、福岡にしかないような産業を、例えば、名古屋だったらトヨタがあるので、自動車産業だったりします。じゃ福岡は、その時に何を産業とするのかっていうのは非常に重要だと思う。先ほどの蓑原先生の話に、アジアの玄関口として、立地的に一番ふさわしいのは福岡だっていう話がありましたけど、もっと言えば、“博多”がそうだった。平清盛が京都に近いからって言って、大輪田泊（オオワダノトマリ）、今の神戸に貿易の拠点を移したじゃないですか。そうすると、1970年代に、私の父親だったり、当時の神戸の原口市長さん等は、「神戸をアジアの玄関口にするんだ」と。それで、ポートアイランドをやっていました。そこには当然、国際会議場だったりとか、ホテルだったりとか、本格的な埋め立てをしました。実はその港湾開発をする時に、すごい重要なのが、神戸っていうのは、国に一度お金を貸してくださいと言ったそうなのですが、貸してくれない。それで神戸市がどうしたかという、一地方都市の神戸がドイツからお金を借りたんです。ドイツからお金を借りて、神戸の港湾開発をやりました。多分、神戸が掲げたビジョンも素晴らしかったのですが、当時ポートアイランドは活気があって、それでP&Gとかの大企業も進出して来たりしました。またシンガポールが実は神戸をロールモデルにしている、今やそのP&Gがシ

ンガポールに移っちゃったんですけど。平清盛を軸にして考えると、これがもう一回福岡に戻ってくるというのは可能性としてもあると思うし、話としては面白いかなと思います。その辺のビジョンを具体的に今の高島さんがどれぐらい考えているのかというと、どうも景気が良くなってる雰囲気の中で、任期中にどれだけ仕事をするかということに一生懸命になり過ぎてしまって、人気取りっぽい感じの仕事をこなしてる気配を感じます。そこで、蓑原さんがおっしゃるように、未来、30年後の未来に、今の市長としては何か計画を立てて、次の市長に渡すぐらいの気持ちで、もうちょっと計画をやって欲しい。それこそ、成熟した論理を持って、1冊本を残していくぐらいの気持ちでやってくれると福岡も少し変わるのかなという気がします。

榎本 本当にすごく戦略的に、したたかにやらなきゃいけないと僕は思っています。というのは、僕はシンガポールにこの2、3年のうちに何度か行ってるんですけど、彼らは既に水ビジネスを世界に売り出しています。そして彼らが次に何を狙っているかということ、金融センターをまさに狙っていて、そのためにサイバーセキュリティを強化しようとしています。確かインターポールだったと思いますけど、彼らの政策や戦略に付加価値のつく施設などを誘致しようと、本当に必死でトップセールをしているんですね。それをみんなで見に行くと、彼ら何を言うかということ、シンガポールは国だからねと。でも、そう言っていると、我々はアジアの一地方都市だし、アジアのリーダー都市にはなれないと思います。なので、これからはもっと彼らを上回る戦略を持って対処しなきゃいけないんじゃないかと思っています。まさに、能古島にいい環境があり、福岡って後背地にですね、田主丸みたいな、いい農地もあって、食料でも、エネルギーでも、効率さえ上げれば、多分自給自足できるぐらいの都市圏になり、九州圏が独立できるポテンシャルを持っていると思います。それを全面的に売り出して、僕らがキッチンと政策をパッケージングして、キチッと戦略的に進めないと、アジアの富は取れない。むしろ、その富を取るために、我々は何をしなきゃいけないのかっていう戦略を、本当に真剣に考えなきゃいけないんじゃないかと思っています。

蓑原 武田さん、あそこにそういう金融をずっとやってきた上で、今まちづくりをやっている面白い人が、1人いるんでね。彼に発言を、今のようなことの感想を求めたらどうでしょうか。

武田 はい。是非、野口さん。よろしくお願いします。



野口 浩平 のぐち こうへい
「代官山ステキなまちづくり協議会」副事務局長
<http://daisukikai.org/>

野口 代官山でまちづくりをしている野口と申します。ご紹介いただいたように、『まちづくりの哲学』という本の企画を担当しました。蓑原先生と宮台先生との対談の司会を務めたおかげで、“まち”では猛獣使って言われていますが、私はそれに「確かに猛獣みたいな先生方ですが、使えてはいません」って答えています。(笑)

今日の話は、概ね三つの話であったように思います。一つは、**まちの価値をどう考えるか?**ということ。それと、**世界の経済環境が大きく変わってきている**ということ。そして、**地球環境の変化の話**だと思っています。それらの大きな変化が訪れようとしているのに、私たちがなかなか変わらないということが問題の本質なのではないでしょうか。おそらくその理由は、慣性の法則なんだと思います。高度成長に合わせて走り続けてきた列車から、飛び降りたり、急ブレーキを踏んだり、急ハンドルを切ったりすることは、ただでさえ難しいのに、これまでの成功体験があるため余計に難しくなっています。それでも、少しずつでも私たちが変わっていくために、今起きている変化について考えておくことはとても重要です。

この『まちづくりの哲学』という本を作ろうと思ったのは、私がまちづくりの現場で問われ続けてきた、良いまちとは何か?に答えようと思ったからです。都市工学の専門家の方に聞いてみたりもしましたが、良いまちが良いことは最初から決まっているんだから、そんな質問には意味がないって怒られたりして、結局わからないままでした。それでも私は、良いまちの良いとは何か?を知っている必要があると思っています。何故なら、そうでないと、自分が何をやっているのかを見失いかねないと思うからです。榎本さんが、先ほどおっしゃった問題提起も、そうしたことに起因してるんじゃないでしょうか。

“まち”っていうのは、これまで僕らが使ってきた近代の物差しでは測れません。科学っていうのは、分析的であり客観的であり合理的です。しかし、**私たちが“まち”を感覚するのは、科学とは真逆です**。先ほど、総合的って話がありましたが、総合的で主観的で生理的なんです。中でも、**主観的である**ということとはとても重要で、まちづくりが合意形成に馴染みにくい理

由でもあります。でも、主観だからみんなバラバラかっという
と、意外とそうでもありません。今日も、始まる前に裏で皆さ
んの話のを伺っていましたが、どんなまちをいい“まち”と考
えているか？ということについては、皆さん価値観を共有して
るような気がしました。

ご紹介いただいたように、私は以前金融機関に所属してい
ましたので、その観点から少し話をしてみます。現在イノベー
ションが起きてる所は、世界のほんの一部でしかなく、ほとん
どがサンフランシスコからシリコンバレーの、大体 100 キロの
範囲に集積しています。あとは、ヨーロッパのほんの一部にあ
るくらいでしょう。では、彼らはなぜそこに集積しているん
でしょうか？ もちろん、人の集積が最大の理由なんですけど、
それ以外に、どんな場所か？が大きく関係しているようなん
です。例えば日本でいうと、鎌倉にいわれるスーパークリエイ
ターと呼ばれる人たちが集積しつつあります。彼らに何故そ
こを選ぶのか？と聞くと、「海があるから」って答えるんです。
それから、サンフランシスコでも言われていることですが、「
歴史があるところがいいんだ」とも言っています。その他には、「
自然があるから気分がいいじゃん」という話も聞きました。彼
らは東京でビジネスをしていますから、60 キロぐらい離れて
る鎌倉は、本来不便なはずなんです。しかし彼らは、わざわざ
そうした場所を選んでいるんです。

チャーターシティという概念を提唱している、ポール・ロー
マーというスタンフォード大学の経済学者がいるんですが、
彼は「これからの都市の選ばれる方は、足による民主主義に
なるべきだ」と言っています。つまり、「そこに先に住んで
いた人だけで話し合っ、”まち”をどうするかを合意しな
がら決めるんじゃないんで、”まち”が多くの人に選
ばれることによって、そのまちが民主的に成立するって
いうことが、これからの都市の在り方じゃないか」と
言っているんです。

昨年ゴールドマン・サックスっていう会社が、「これからの
投資先はバーチャルリアリティだ」って話をしています。つ
いに「場所でもプロダクツでもない、バーチャルなものこそ
これからの投資対象だ」って言うんですね。ニュースでよく
言われているとおり、ドローン等を使った物流がドンドン
発達してくると、実際に商店に行ってまちの賑わいを楽し
むということ自体が陳腐なことになってしまうかもしれな
い。でも一方で、先ほどのスーパークリエイターの人たち
が鎌倉を選ぶように、どこに居るかの重要性は逆に増し
ているように感じます。私たちはテクノロジーの発達のお
かげで、商業地をつくらなくては行けないということに
拘束されない、“まち”の価値自体を目的に
つくる自由度を手に入れつつあるとも考えられます。もし、
テクノロジーが我々に、都市を自由につくるチャンスを
与えているのであれば、その中でどうやって“選ばれる
まち”をつくっていくのか？ということが問われているん
じゃないで

ようか？

最後に地球環境の変化について少しだけ触れますが、
基本的には悲観的というのが、現在私たちが置かれて
いる状況でしょう。地球人口の増加スピードは早く、
途上国の近代化もものすごいスピードです。それは、
地球上のあらゆる資源を使い尽くすことを意味し
ます。しかし、その中であえて希望を語るとすると、
そのスピードそのものを希望として捉え直すとい
うことなのかもしれません。世界には、ポスト
モダンとモダンとプレモダンの国が混在して
います。先ほどの鎌倉の例のように、ポスト
モダンの人々の価値観は、地球環境保全と親
和的です。現在のモダン国家は、我々が経験
した三分の一のスピードでポストモダン化し
ようとしています。おそらくプレモダン国家
は、モダン、ポストモダンへの変化をそれ
以上のスピードで駆け抜けるでしょう。彼ら
が、地球環境保全と親和性の高い価値観を
会得するスピードは、もしかしたら、地球
環境が壊滅的になるスピードを超えるかも
しれないということが一縷の望みです。
以上です。



■会場との対話

武田 ありがとうございます。すっかり時間が経っておりまして、白熱した対話をこの輪の中でやってきたんですけど、ここからは、せっかくですので、フロアの皆さんにも少し、今日の対話を聴いていただいたご感想でも結構ですし、蓑原先生への質問でも結構なので、何名か、よろしければご発言いただきたいと思います。どうでしょうか。ございませんか。

“6次化”による地域活性化を考える

フロア1 久留米市田主丸町から出て来ました井上と申します。今日、聴いた流れも踏まえまして、皆さんにお伺いしたいことがあります。今、田主丸町でも少しずつ話をよく聞くようになってきたのが“6次化”っていう久留米市が推進している政策で、全国でもいろんなまちでやってる政策についてです。実際には、なかなかうまく機能していないっていうのが、僕の印象です。うまく1次産業、2次産業、3次産業を組み合わせ、小さな道の駅のようなところでいろんなことをやられているんですが、それは最初だけで、うまく機能している所が少ないというのが実情です。私自身もお店をさせていただいているんですが…。今すごく興味があることなので、その“6次化”について、何かいいアドバイスだったり、こういうことなんだっていうことを教えていただければと思います。

榎本 難しいですね。僕の実家は、魚沼産コシヒカリを作っているんですよ。うちの親父は年間で自由になるお金は20万円ぐらいしかない。米を売って、卸して、その後、肥料を買って設備投資して。たぶん世界で一番付加価値の高い米を作っていて、その有り様なんですけど。親父に何が欠如しているかという、商売根性がないんですよ。「高い所に沢山売ったらいいじゃん。」と思うんですけど、新米の時期には僕に電話がかかってきて、「30キロを1万円ぐらいで人に譲りたいんだけど、どっか販路ないかな？」と。「お世話になった人に配りなさい。」と僕に渡すんじゃなくて、香港に持って行って1俵30万円売ったらいいじゃんかと思うんです。そういう発想が、明らかに農業に携わっている方には欠如しているんじゃないかと思っています。それをみんな持てとは思わないんですけど。どう売って、自分の生業とするのかというところを、もう少し考えた先に、僕は“6次化”があるんじゃないかなと思います。なので、一つの選択肢として“6次化”があるのであって、“6次化”をしたから儲かるという訳ではないんじゃないかなと僕は思っています。なので、僕は夢があって。今は都市計画をしていますけど、早々と引退して米作りをしようと思っています。というのは、魚沼

産コシヒカリを作っている農家の人たちって、言い方悪いんですけど、大学に行けなかった人たちなんです。でも、そこにいろんな人材が入って来ると、ちょっと世の中変わるんじゃないかなと、そんなことをしたいなど。勝手に意志表明になりましたけども。答えになってませんが。

黒瀬 僕、全然、この方面詳しくないので、逆に教えて欲しいことがあります。それは福岡に戻って来て、なぜだか八女に行く人が多いような気がしているんですね。福岡から歴史的なまちとか見に行きたい時に、八女を勧める人が多い。八女の歴史的な魅力は、勿論知ってるんですけども。歴史だけだったら、いろいろ他にもあるのに、何故か八女に行つてとか、わざわざ古い町家を改装した「川の字」に泊まるとかっていうのをしにいたりという人が多くて。なんでだろうと思ったんです。その先に全然答えがないんですけども、多分、何か人を引き付ける力があつたり、もしくは、そういうことを仕掛けたっていう、まず人がいらして、それとそこにあるものが本当にうまく有機的に結び付いてるんじゃないかなと思っています。非常にぼんやりしたお話で申し訳ないんですけど。

そんなこと感じて、そういう意味で久留米はどうなんですか。というのは、日本のなかには日帰りで行ける距離に、まともに人口がある“まち”がないっていう非常に厳しい地域が沢山あるんです。それに比べれば、九州は、大体どこでも狙いを定めれば何らかの“まち”があるというのは、恵まれてると思います。何の答えにもなっていませんが、そういう意味で久留米はすごく相対的には恵まれた地域と言うと失礼ですけども、そういうとこなんじゃないかなという感想を持ちました。

石橋 直接の答えになるか分かりませんが。糸島の方で、今、海鮮丼屋をやっている後輩がいるんですけど、その人の取り組み方は、揚がって来る魚に適正な価格が付かず、すごく安く売られてしまっている状況があると。実際、それを食べるとおいしい。だから、彼は何をやってるかっていうと、適正な価格で、それをキチッと買ってもらうということをやっているんですよ。つまり、地域に埋もれてしまっている資源が適正な市場に出るかどうかを、買う側も意識していく。その両方の話が出てこない、経済がうまく循環しないのかなと思っています。さっきの魚沼産のブランドがあるものが高く売れる話と真逆の話として、価値が一見あるのか、無いのか分からないようなものが、買い手側がすごい目利きで適正価格で買ってあげることによって、価値を生み出すっていう話があるんですよ。なので、“6次化”の話とつながるかどうかわかんないんですけど、ふと、それを思っ、そういう話もあります。

蓑原 今の話に対して、マイナス側っていうか、暗い話をしま

すよね。実は、私は茨城県庁に5、6年近く勤めてですね。茨城県っていうのは、農産物の産出額で日本全国1位とか、2位とかいう産物が沢山あるんですよ。ところが、茨城の農家っていうのは、そこそこ豊かだけど、要するに、土地が豊かになってるんであって、農産物が豊かになってないんですね。ってことは、何を意味するかというと、**1次産業の担い手、2次産業の担い手、3次産業の担い手の知恵の質は違うこと。だから、6次産業なんていい加減なことって、本当にそれがうまくいくなんていうふうに考えない方がいい**ということ。これが、一つのネガティブな言い方です。

今度はポジティブな言い方をすると、だけど、実はそういう形で、本当に金儲けのことなんか考えない、20万円でもいいから、いい米を作るんだと思ってる人が、ちゃんと適正な価格で売れるようなサポートするシステムがあるはずなんです。農業協同組合っていうのは、本来そういう性質のもんだったんですよ。ところが、今や農業協同組合は商社化しちゃって、自分たちの組織の延命のためにしか動かないような構造になってるから、実際の生産者のところに下りて来ない。私はやっぱり、本当に生産者は、まとまって自分たちで香港に売りに行けばいいと、そういうような新しい農業組合を自分たちでつくってくような方向に議論すれば、「6次化」みたいな話っていうのはあり得るかもしれない。農業協同組合的なものをつくれれば、そこに農家ではない売るのが得意な人を雇って使えるかもしれない。そういう形になれば、自分たちのためにちゃんと動く人ができるんだけど、残念ながら今の農業協同組合はそういう形で動いてないから、そういうふうにはならない。恐らく、今のようなアドバイスは役に立つかどうか分かりませんが、もし、役に立つとすれば、**仲間を作って、組合つくって、誰か搾取してるやつをバイパスするより他ない**というふうに思います。

武田 ありがとうございます。いいですね、なんか。この輪にポンっと質問したら、いろんな文殊の知恵が出てくるってのは、それでは、どうぞ。次の方。

“選ばれる都市”の教育って？

フロア2 先ほど、選ばれる都市について話があったと思うんですけど。「産業がないと都市は選べない。」というお話があったと思うんですけど。「選ばれる都市」の条件として、大きいなど思うのが、特に今は教育の問題が結構大きいんじゃないかなんか思っています。やっぱり若い家族世帯は、自分の子どもも教育の環境っていうのが最も関心が高いんじゃないかなんかと思うんです。今は子どもの貧困というような問題もあるんですが、**皆さんは都市を考える、都市全体のレベルで“教育”とい**

うものを考えた時に、どのようなことをお考えなのか、お伺いしたいです。

榎本 僕一つ格言というか、モットーにしていることがあって。それは恩師、中村文彦という先生ですけど、彼に「君は何において都市の計画するにしても、ニーズとインパクトと実現可能性、その3点をキチンと考えなさい。」と教えられました。教育の貧困問題とか、雇用の問題って、何かの政策のインパクトとも捉えられるんじゃないかなんか思っています。まさに、横串の横断的な都市計画が、今、日本に無いというのは、僕はそこが一番の問題点があると思っています。というのは、都市のどこかを豊かにしたら、どこかの市町村が富を吸い上げてるわけなので、そこが不幸になっているかもしれないっていうところに対して、**僕らは都市としてどんな政策を打てるんだみたいなことを、キチンと考えなきゃいけないよ**なと思っています。まだそこまで、できてないので、これから頑張りたいなと思っています。

ただ、教育で人が選ぶというのは、まさにアイランドシティって、小中連携校があるんですけど、それで今、非常に高所得で優秀な方々がアイランドシティに住み始めていますし、まさに千葉の幕張ベイタウンも教育熱心な方々が住んでいて文京地区的な雰囲気を出している。それだけが全てではないと思いますけど、**そういう魅力（教育）を少しずつ地区に付けていくというのは、これからは絶対大事になるんじゃないかな**と思います。

水谷 能古島は人口が減ったので高齢化が進んでいて小中学校の存続の危機が一時期あったんですよね。その時に、うちは1クラスしかないんですけど。定員が14人までかな、小中どっちもですね。今、福岡市で“小規模校特別転入学制度（海っ子山っ子スクール）”っていうのがあって、まちから島に通えるんです。すごく人気があって。14人しか入れないので、何パーセントって言ったかな、かなり倍率が高い状況です。ただ、能古島自体は漁師さんもいるし、農家の人もいるし。漁師さんの中には漁師やってるのに海にタバコ捨てる人もいて（笑）。言ったら悪いけど、所謂「お勉強」をしてこなかった人たちなんですよ。でも、僕、そういう人たちともお酒も飲むし、遊んだりもします。**重要なのは頭がいいとか悪いとかっていうように、教育ってそもそも何？**っていう時に、**そういう人たちの価値観を理解する共有することが非常に重要**。お勉強とは違う何かをその人たちから教わることができるんですよ。要は、それを考えた時に、じゃ、まちってどうあるべきなんだろうっていう話になると思うんです。都市って、どうあるべきなんだろうと。例えば、隣近所の付き合いがあるって言った時に、建築物の単体のデザインもそうですけど、空間として、都市ってどうある

べきなのかっていう話になると思います。そういうふうを考えていくことが、非常に重要じゃないかなというふうに、僕は思います。

蓑原 おっしゃるとおりなんです。ですから、榎本さんもおっしゃってたけど、私は、**沢山の人と一緒になって幕張ベイトウンって、人口2万6000人のまちをつくった時の最初のコンセプトの中に、やっぱりいい学校が必要だなと思いました。そうしないと、いい住宅地は造れない**など。そしたら、非常にうまく具合に千葉市の教育委員会が、そこを実験校として指定してくれて。そこに溜（タマリ）さんっていう女性の校長先生が来て、極めていい教育をしてくれたんですね。でも、あつという間にその後、小学校が3つできたんだけど、その3つの学校ともすごいグレードが高いもんだから、幕張ベイトウンっていうのは、出来て20年経って空き家がドンドン出ても、空き家がドンドン埋まっちゃうんです。若い人が買いに来てくれるんですね。それは、おっしゃるとおり、非常に重要な要素でいいんですが。その時に、最大の問題は、教育委員会がそういうことについて、うまく協力的に総合的に動いてくれるかどうかということ。特に私が今、十津川で困ってるのは、十津川高校っていうのは、偏差値レベルからいくと駄目な、あんまり良くない高校だもんだから、ドンドン十津川の人でも、優秀な人は外へ出ちゃう。何とかして十津川高校を維持させたいと思って議論していく中で、一つの絶対売れる議論だと思うのは、十津川っていうのは、昔からの歴史がすごくあって、剣道が強いんです。人口が少ないくせに、非常に剣道が強い。全国区で有名なんですね。それはもう剣道で、売り込んだらいいじゃないですかっていう話に対して、教育委員会、特に奈良県の教育委員会なんかは全く動いてこない。そういうことがあるわけですね。今のようなお話は、事実関係としてはその通りだけでも、そういうことを認識して、**教育委員会がまちづくりとか全体のまちの育て方に関与するかどうかは、その後のまちの評価に繋がっていく**ということだけは申し上げておきたいのです。

■最後に

武田 それでは時間が来ていますので、この辺で終わりたいと思います。今日、私がいままでしやべらなかつたので、対話としてはすごく大成功だと思っています。蓑原先生が最初におっしゃられた通り、今日この場で何かの答えが分かるということではなく、**この場で共有すべきもの、それを考えるプロセス、目標を発見する力、そのスタンスを持つことに対しては、今日はすごくいい機会になったんじゃないかな**と思います。最後に蓑原先生から、コメントをお願いします。

蓑原 ありがとうございます。武田さんは非常にベテランですから、ひと月半ぐらい前に、この会をどういうふうに持ちましようかって相談を持ち掛けられたんです。私は即座に「やめましょう、そういうことをしたら、真剣な議論にならない」と。今日は、準備をしてないために、やっぱり議論が盛り上がったと思っています。その意味でも、大変ありがとうございました。

ただ、最後に言いたいとすれば、最初に申し上げたことの繰り返しになるかもしれないけど。我々は、ずっと教育されて育ってきた時代っていうのは、人間で言うと左脳を動かして言葉とか、数とか、そういう抽象的な世界で育ってきちゃっています。だけど、世界は今、近代の初期のように混迷の中に投げ込まれていて、その世界を生き抜くために、今、本当に今求められているのは、右脳で動かしてるような感動とか、音感とか、人間関係の温かさとか、そういったものを大事にすることなのではないのか。そういった世界が今表に出て来ていて、そのあたりを大事にしない限り、実は、幸せな生活もつくれないし、いい環境もつくれないっていうことが、だんだん分かって来ている。そういう意味では**新しい若い人たちを中心として、自分たちが身体的に幸せな世界、心理的に幸せな世界をどうやってつくるのか**ってことを、本当にこれから模索して欲しい。それが人本位の究極的な意味ではないかと思う。我々世代のような近代化の価値観で固まったやつは役に立たないと思った方がいい。むしろ、若い人たちは自分たちの身体で考えてください。そういうことをお願いしたいと思います。



■対話を終えて

武田重昭 (モデレーター)

——対話がつくる都市

蓑原先生との対話に備えて、進め方や論点について事前にプランを練ってご連絡した。奥志賀でスキーを楽しまれていた先生からすぐにお返事をいただいた。

「貴方のメモを読めていませんが、僕の今までの本を読んだことがない人が参加してもつまらないと思います。僕が望んでいるのは、独りよがりかもしれない僕自身の主張や発言に対して、若い人が、その時代性、限界を指摘し、あるいは厳しく批判してくれることです。だから、あまり事前調整をせずにいきなりでやりましょう。最初に僕から、切り出しの辞を20分ぐらい話し、あとは、みなさん一人一人から手厳しい意見や感想を話してください。それを受けて、僕が議論を展開するのを貴方が助けてください。

●●●●●●●●●● ●●●●●●●●●●●●●●●●
いい加減のようですが、そのほうが面白くなると思います」

僕たちはプランを失った。これまでの右肩上がりの時代とは異なった、予測のつかない未来に直面するなかで、「これから、どう都市をつくるのか」を考える際に、予定調和型のマスタープランは意味を持たなくなった。はじめから描ける未来など、もはや存在せず、答えは日々の挑戦の中から見つけ出していくほかないのだ。その際に道標となるのは、他者との熱心な対話による意見や批評だ。ひとつの対話の場をつくることを通じて、これからの都市をつくる姿勢を学ばせていただいた。

蓑原先生の教えを胸に、対話からあたらしい都市のつくり方を見出していきたいと思う。そのためには議論の場を共有できる仲間が必要だ。幸いなことに、これをきっかけにして九州にたくさんの仲間ができた。これからもぜひ対話を重ねていきたい。そして、それを通じて魅力的な都市のつくり方を考えていきたい。いい加減のようだが、その方が面白い都市になるはずだ。

尾辻信宣 (企画調整・記録取りまとめ)

——僕らの『都市をつくる仕事』

私も長年、実務に携わり、運よく都市計画、アーバンデザインの最先端で活躍される方々と近いところで仕事をやってきました。そんな私ですが、登壇された一人、榎本さんが言われた「僕らは、今、まさに時代の境目＝パラダイムシフトの真っ只中に居るのは。」との問題意識に非常に共感していて、ここ数年来、私が携わってきた仕事のあちこちで、これまで確信してきたものと現実との間に違和感、矛盾を感じていました。そんな中、縁あって、山下裕子さんと知り合い、蓑原先生をお招きし、普段は話題にすることが少ない、都市計画・アーバンデザインについての根源的な議論や、お話を聴き考える機会を得ることができました。講演を終えて、腑に落ちたり、新たな発見があったり、非常に得ることの多かった『対話の会』だったと企画調整の担当として満足しています。

近代主義が標榜してきた「効率化」からの脱却。それにも増して「激変する地球環境」、「人口爆発・人口流動化の時代」がまさに迫っていて、我々はそれに対抗(対応)していかなければならないのだと、蓑原先生は示されました。そして、実践から得られる都市デザイン、それを修練し汎用化を図り、そしてまちづくりへ、都市計画へフィードバックしていく。それを何度も何度も現場で繰り返し、領域を超えて様々な人と連帯し、悩み、闘いながら、方法論・戦略を磨いていき、設計・計画へと昇華させていく。それを次世代の僕らは、個々の現場でそれぞれ各々が挑戦していく。それが僕らの仕事なのだと思います。

今回、この企画は、都市環境デザイン会議九州ブロック (JUDI 九州) が全面サポートして実施しました。こうした『対話の会』が新たな都市計画・アーバンデザインの端緒となり、その息吹を西の地より吹かせられるよう、さまざまな企画・機会をつくり、多くの方とのネットワークを広げられるよう今後も取り組んでいきたいと思っています。

■終了後、会場にて養原先生を囲んで
三列：西海、福田
二列：養原夫人、榎本、水谷、片田江、黒瀬、平田
前列：武田、養原、山下、石橋、尾辻



これから、都市をつくる仕事 ～蓑原敬の構想力と思想を次世代に継承する～

【日時】2017年2月27日(月) 19:00～21:15 【会場】アクロス福岡 円形ホール(福岡市中央区天神1-1-1)

【主催】蓑原敬先生の話福岡でトコト聴く会

【共催】都市環境デザイン会議九州ブロック 日本都市計画家協会福岡支部 【後援】日本都市計画学会九州支部

本講演は、JUDI都市環境デザイン会議『公募型プロジェクト』およびJSURP日本都市計画家協会福岡支部の助成を受けて実施されました。

都市環境デザイン会議 (JUDI = Japan Urban Design Institute) は、領域を超えて、力と知恵を結集すれば、より一層魅力のある素晴らしい都市がつくられるのではないかとの思いから、多様なジャンルの都市づくりにかかわる人びとが集まり、1991年5月に結成されました。JUDIは、北は北海道から南は沖縄(琉球)まで10のブロックが活動しています。本講演会の実施にあたり、九州ブロック (JUDI九州) が全面的にサポートしました。【JUDI公式ホームページ】<http://www.judi.gr.jp/> 【事務局】東京都北区田端新町3-14-6 E-mail:postmaster@judi.gr.jp Tell:03-6240-8827

※本報告書の内容の無断複製・転載を禁止します。



Japan Urban Design Institute